

日和下駄

一名 東京散策記

永井荷風

青空文庫

序

東京市中散歩の記事を集めて『日和下駄』と題す。そのいはれ本文のはじめに述べ置きたれば改めてここには言はず。『日和下駄』は大正三年夏のはじめころよりおよそ一歳あまり、月々雑誌『三田文学』に連載したりしを、この度米^{へいじんどう}刃^{へん}堂^{どう}主人のもとめにより改^{かいざん}竄^{くわん}して一巻とはなせしなり。ここにかく起稿の年月を明^{あきらか}にしたるはこの書板^{はん}成りて世に出づる頃には、篇中記する所の市内の勝景にして、既に破壊せられて跡方もなきところ渺^{すくな}からざらん事を思へばなり。見ずや木造の今戸^{いまど}橋^{ばし}は蚤^{はや}くも変じて鉄の釣橋となり、江戸川の岸はせめんとにかくためられて再び露草^{つゆくさ}の花を見ず。桜田御門外^{さくらだいもんそと}また芝赤羽橋^{むこうあきぢば}向の閑地には土木の工事今まさに興^{おこ}らんとするにあらずや。昨日の淵^{ふち}今日の瀬となる夢の世の形見を伝へて、拙^{つたな}きこの小著、幸に後の日のかたり草の種ともならばなれかし。

乙卯^{いっぽう}の年晚秋

第一 日和下駄

人並はずれて丈せいが高い上にわたしはいつも日和下駄ひよりげたをはき蝙蝠傘こうもりがさを持つて歩く。いかに好く晴れた日でも日和下駄に蝙蝠傘でなければ安心がならぬ。これは年中湿氣の多い東京の天気に対して全然信用を置かぬからである。変りやすいは男心に秋の空、それにお上かみの御政事おせいじとばかり極きまつたものではない。春の花見頃ひるまえ午前ひるすぎの晴天は午後ひるすぎの二時三時頃からきまつて風にならねば夕方から雨になる。梅雨つゆの中は申すに及ばず。土用に入ればいついかなる時驟雨しゅうう沛然はいぜんとして来らぬとも計りがたい。はか尤もこの変りやすい空模様思いがけない雨なるものは昔の小説に出て来る才子佳人が割なき契わりを結ぶよすがとなり、また今この世にも芝居のハネから急に降出す雨を幸いそのまま人目をつつむ幌ほろの中、しつぽり何処ぞで濡れの場を演ずるものまたなきにしもあるまい。閑話休題それはさておき日和下駄の効能といわば何ぞそれ不意の雨のみに限らんや。天氣つづきの冬の日といえども山の手一面赤土を捏こねか返す霜解しもどけも何のその。アスフルト敷きつめた銀座日本橋の大道おおどおり、やたらに溝の水を撒きちらす泥濘ぬかるみとて一向驚くには及ぶまい。

わたし
私はかくの如く日和下駄をはき蝙蝠傘を持つて歩く。

市中しちゅうの散歩は子供の時から好きであつた。十三、四の頃私の家は一時うち小石川こいしかわから麹町うじまちながたちょう永田町えいたちょうの官舎へ引ひき移うつつた事があつた。勿論電車のない時分である。私は神にしきちょう田錦町たにぎみちょうの私立英語学校へ通かよつていたので、半蔵御門はんぞうごもんを這入はいつて吹上御苑ふきあげぎょえんの裏手なる老松鬱々たる代官町だいかんちょうの通をばやがて片側に二の丸三の丸の高い石垣と深い堀とを望みながら竹橋たけばしを渡つて平川口ひらかわぐちの御城門ごじょうもんを向うに昔の御撫屋おつきや今いまの文部省に沿うて一つ橋ひとつばしへ出る。この道程みちのりもさほど遠いとも思わず初めの中は物珍しいのでかえつて樂しかつた。宮内省裏門の筋すじ向むけなる兵營に沿うた土手の中腹に大きな榎えのきがあつた。その頃その木蔭なる土手下の路傍みちばたに井戸があつて夏冬ともに甘酒あまさけ大福餅だいふくもち稻荷いなり鮓あめゆ飴湯しゃりきなんぞ売るもののがいめい荷おろを卸して往来の人の休むのを待つていた。車力うまかたや馬力うまかたが多い時には五人も六人も休んで飯をくつている事もあつた。これは竹橋の方から這入つて來ると御城内代官町の通は歩くものにはそれほどに気がつかないが車を曳くものには限りも知れぬ長い坂になつていて、丁度この辺へんがその中途に當つているからである。東京の地勢はかくの如く漸次に麹町四谷の方へと高くなつてゐるのである。夏の炎天には私も学校の帰途かえりみち井戸の水で車力や馬力と共に手拭てぬぐいを絞つて汗を拭き、土手の上に登つて大

榎の木蔭に休んだ。土手にはその時分から既に「昇ルベカラズ」の立札が付物になつていたが構わず登れば堀を隔てて遠く町が見える。かくの如き眺望は敢てここのみならず、外濠の松蔭から牛込小石川の高台を望むと同じく先ず東京中での絶景であろう。

私は錦町からの帰途桜田御門の方へ廻つたり九段の方へ出たりいろいろ遠廻りをして目新しい町を通つて見るのが面白くてならなかつた。しかし一年ばかりの後途中の光景にも少し飽きて来た頃私の家は再び小石川の旧宅に立ち戻る事になつた。その夏始めて両国との水練場へ通いだしたので、今度は繁華の下町と大川筋との光景に一方ならぬ興を催すこととなつた。

今日東京市中の散歩は私の身に取つては生れてから今日に至る過去の生涯に対する追憶の道を辿るに外ならない。これに加うるに日々昔ながらの名所古蹟を破却して行く時勢の変遷は市中の散歩に無常悲哀の寂しい詩趣を帶びさせる。およそ近世の文学に現れた荒廃の詩情を味おうとしたら埃及及伊太利に赴かずとも現在の東京を歩むほど無残にも傷ましい思をさせる処はあるまい。今日見て過ぎた寺の門、昨日休んだ路傍の大樹もこの次再び来る時には必貸家か製造場になつてゐるに違ひないと思えば、それほど由緒のない建築もまたそれほど年経ぬ樹木とても何とはなく奥床しくまた悲しく打仰がれる

のである。

一体江戸名所には昔からそれほど誇るに足るべき風景も建築もある訳ではない。既に宝ほ晋斎其角が『類相子』にも「隅田川絶えず名に流れたれど加茂桂よりは賤しくして肩かたおち落したり。山並もあらばと願はし。目黒は物ふり山坂おもしろけれど果てしなくて水遠し、嵯峨に似てさみしからぬ風情なり。王子は宇治の柴舟のしばし目を流すべき島山もなく護国寺は吉野に似て一目千本の雪の曙思ひやらるゝにや爰も流なくて口惜し。住吉を移奉る佃島も岸の姫松の少きに反橋のたゆみをかしからず宰府は崇め奉る名のみにして染川の色に合羽ほしわたし思河のよるべに芥を埋む。都府樓觀音寺唐絵と云はんに四ツ目の鐘の裸なる、報恩寺の甍の白地なるぞ屏風立てしやうなり。木立薄く梅紅葉せず、三月の末藤にすがりて回廊に筵を設くるばかり野には心もとまらず……云々。」そして其角は江戸名所の中唯ひとつ無疵の名作は快晴の富士ばかりだとなした。これ恐らくは江戸の風景に対する最も公平なる批評であろう。江戸の風景堂宇には一として京都奈良に及ぶべきものはない。それにもかかわらずこの都会の風景はこの都會に生れたるものに対して必ず特別の興趣を催させた。それは昔から江戸名所に関する案内記狂歌集絵本の類の夥しく出板されたのを見ても容易に推量する事が出来る。

太平の世の武士町人は物見遊山ものみゆさんを好んだ。花を愛し、風景を眺め、古蹟とを訪う事は即ち風流な最も上品な嗜みたしなみとして尊ばれていたので、實際にはそれほどの興味を持つたないものも、時にはこれを衒てらつたに相違ない。江戸の人が最も盛に江戸名所を尋ね歩いたのは私の見る處やはり狂歌全盛の天明てんめい以後であつたらしい。江戸名所に興味を持つには是非とも江戸軽文学の素養がなくてはならぬ。一步を進むれば 戯作者げさくしゃかたぎ 気質きしち でなければならぬ。

この頃私が日和下駄をカラカラ鳴ならして再び市中いちゅうの散歩を試み始めたのは無論江戸軽文学の感化である事を拒まない。しかし私の趣味の中には自らまた近世デレツタンチズムの影響まじも混まじつていよう。千九百五年巴里パリーのアンドレエ・アレエという一新聞記者が社会百般の現象をば芝居でも見る気になつてこれを見物して歩いた記事と、また仏国各州の都市古蹟を歩あるきまわ廻まわった印象記とを合せて En 『アン』 Flanant 『フラアナン』と題するものを公にした。その時アンリイ・ボルドオという批評家がこれを機会としてデレツタンチズムの何たるかを解剖批判した事があつた。茲にそれを紹介する必要はない。私は唯西洋にも市内の散歩を試み、近世的世相と並んで過去の遺物に興味を持つた同じような傾向の人がいた事を断つて置けばよいのである。アレエは西洋人の事故ことゆえ その態度は無論私ほど社会に對して無関心でもなくまた肥遜的ひどんてきでもない。これはその本国の事情が異つてゐるからで

あろう。彼は別に為すべき仕事がないからやむをえず散歩したのではない。自ら進んで観察しようと企てたのだ。しかるに私は別にこれといつてなすべき義務も責任も何にもないわば隠居同様の身の上である。その日その日を送るになりたけ世間へ顔を出さず金を使わず相手を要せず自分で勝手に呑氣(のんき)にくらす方法をと色々考案した結果の一つが市中のぶらぶら歩きとなつたのである。

フランスの小説を読むと零落(おちぶ)れた貴族の家に生れたものが、僅少の遺産に自分の身だけはどうやらこうやら日常の衣食には事欠かぬ代り、浮世の樂(たのしみ)を余所に人交(ひとまじわ)りもできず、一生涯を果敢(はか)なく淋しく無為無能に送るさまを描いたものが沢山ある。こういう人たちは何か世間に名をなすような専門の研究をして見たいにもそれだけの資力がなし職業を求めて働きたいにも働く口がない。せん方なく素人画(しろうとえ)をかいたり釣をしたり墓地を歩いたりしてなりたけ金のいらないようなその日の送方(おくりかた)を考えている。私の境遇はそれとは全く違う。しかしその行為とその感慨とはやや同じであろう。日本の現在は文化の爛熟してしまつた西洋大陸の社会とはちがつて資本の有無(うむ)にかかわらず自分さえやる気になればすべき事業は沢山ある。男女鳥合の徒を集めて芝居をしてさえもし芸術のためというような名前を付けさえすればそれ相応に看客(かんきやく)が来る。田舎の中学生の虚榮心を誘出(さそいだ)して

投書を募れば文学雑誌の經營もまた容易である。慈善と教育との美名の下に弱い家業の芸人をおどしつけて安く出演させ、切符の押売りで興行をすれば濡手で粟の大儲も出来る。富豪の人身攻撃から段々に強面の名前を売り出し懷中の暖くなつた汐時を見計つて妙に紳士らしく上品に構えれば、やがて国會議員にもなれる世の中。現在の日本ほど為すべき事の多くしてしかも容易な国は恐らくあるまい。しかしそういう風な世渡りを潔しとしないものは宜しく自ら譲つて退くより外はない。市中の電車に乗つて行先を急ごうというには乗換場を過ぎたびごとに見得も体裁もかまわざ人を突き退け我武者羅に飛乗る蛮勇がなくてはならぬ。自らその蛮勇なしと省みたならば徒に空いた電車を待つよりも、泥龜の歩み遅々たれども、自動車の通らない横町あるいは市区改正の破壊を免れた旧道をてくてくと歩くに如くはない。市中の道を行くには必しも市設の電車に乘らねばならぬと極つたものではない。いささかの遅延を忍べばまだまだ悠々として潤歩すべき道はいくらもある。それと同じように現代の生活は亞米利加風の努力主義を以てせざれば食えないと極つたものでもない。鬚を生し洋服を着てコケを脅そうという田舎紳士風の野心さえ起さなければ、よしや身に一銭の蓄なく、友人と称する共謀者、先輩もしくは親分と称する阿諛の目的物なぞ一切皆無たりとも、なお優游自適の生活を営む方法は

勘くはあるまい。同じ露店の大通商人となるとも自分は髭を生し洋服を着て演舌口調に医学の説明でいかさまの薬を売ろうよりむしろ黙して裏町の縁日にボツタラ焼をやくか粉細工でもこねるであろう。苦学生に扮装したこの頃の行商人が横風に靴音高くがらりと人の家の格子戸を開け田舎訛りの高声に奥様はおいでかなぞと、ややともすれば強請がましい凄味な態度を示すに引き比べて昔ながらの脚半草鞋に菅笠をかぶり孫太郎虫や水蜘蛛の虫箱根山山椒の魚または越中富山の千金丹と呼ぶ声。秋の夕や冬の朝などこの声を聞けば何とも知れず悲しく淋しい気がするではないか。

されば私のてくてく歩きは東京という新しい都会の壯觀を称美してその審美的価値を論じようというのでもなく、さればとて熱心に江戸なる旧都の古蹟を探りこれが保存を主張しようという訳でもない。如何となれば現代人の古美術保存という奴がそもそも古美術の風趣を害する原因で、古社寺の周囲に鉄の鎖を張りペンキ塗の立札に例の何々スペカラズをやる位ならまだしも結構。古社寺保存を名とする修繕の請負工事などと来ては、これ全く破壊の暴挙に類する事は改めてここに実例を挙げるまでもない。それ故私は唯目的なくぶらぶら歩いて好勝手なことを書いていればよいのだ。家にいて女房のヒステリイづら面に浮世をはかなみ、あるいは新聞雑誌の訪問記者に襲われて折角掃除した火鉢を敷島

の吸殻だらけにされるより、暇があつたら歩くにしくはない。歩け歩けと思つて、私はてくてくぶらぶらのそのそといろいろに歩き廻るのである。

元来がかくの如く目的のない私の散步にもし幾分でも目的らしい事があるとすれば、それは何という事なく蝙蝠傘に日和下駄を曳摺つて行く中、電車通の裏手なぞにたまたま残つてゐる市区改正以前の旧道に出たり、あるいは寺の多い山の手の横町の木立を仰ぎ、溝や堀割の上にかけてある名も知れぬ小橋を見る時なぞ、何となくそのさびれ果てた周囲の光景が私の感情に調和して少時我にもあらず立去りがたいような心持をさせる。そういう無用な感慨に打たれるのが何より嬉しいからである。

同じ荒廃した光景でも名高い宮殿や城郭ならば三体詩なぞで人も知つてゐるよう
に、「太掖勾陳处处疑。薄暮毀垣春雨裏。
春雨の裏。」あるいはまた、「燐帝春游古城在。壞宮芳草滿人家。
游せる古城在り。壞宮の芳草人家に満つ。」などと詩にも歌にもして伝え
ることができよう。

しかし私の好んで日和下駄を曳摺る東京市中の廢址は唯私一個人にのみ興趣を催させるばかりで容易にその特徴を説明することの出来ない平凡な景色である。譬えば砲兵工

廠の煉瓦壠にその片側を限られた小石川の富坂をばもう降尽、そうと/orい左側に一筋の溝川がある。その流れに沿うて蒟蒻閣魔の方へと曲つて行く横町なぞ即その一例である。両側の家並は低く道は勝手次第に迂つていて、ベンキ塗の看板や模造西洋造りの硝子戸なぞは一軒も見当らぬ処から、折々冰屋の旗なぞの閃く外には横町の眺望に色彩といふものは一つもなく、仕立屋芋屋駄菓子屋挑灯屋なぞ昔ながらの職業にその日の暮しを立ててゐる家ばかりである。私は新開町の借家の門口によく何々商会だの何々事務所なぞという木札のれいれいしく下げてあるのを見ると、何という事もなく新時代のかかる企業に對して不安の念を起すと共に、その主謀者の人物についても甚しく危険を感じるのである。それに引かえてこういう貧しい裏町に昔ながらの貧しい渡世をしている年寄を見ると同情と悲哀とに加えてまた尊敬の念を禁じ得ない。同時にこういう家の一人娘は今頃周旋屋の餌になつてどこぞで芸者でもしていはせぬかと、そんな事に思到ると相も變らず日本固有の忠孝の思想と人身売買の習慣との關係やら、つづいてその結果の現代社会に及ぼす影響なぞについていろいろ込み入つた考えに沈められる。

ついこの間も麻布網代町辺の裏町を通つた時、私は活動写真や国技館や寄席などのビルが崖地の上から吹いて来る夏の風に翻つてゐる冰屋の店先、表から一目に見通され

る奥の間で十五、六になる娘が清元きよもとをさらつてゐるのを見て、いつものようにそつと歩あゆみを止めた。私は不健全な江戸の音曲おんぎょくというものが、今日の世にその命脈を保つてゐ事を訝しく思うのみならず、今もつてその哀調がどうしてかくも私の心を刺※するかを感じ思議に感じなければならなかつた。何気なく裏町を通りかかつて小娘の彈く三昧線しゃみせんに感動するようでは、私は到底世界の新しい思想を迎える事は出来まい。それと共にまたこの江戸の音曲をばれいれいしく電氣燈したの下で演奏せしめる世俗一般の風潮にも伴つて行く事は出来まい。私の感覚と趣味とまた思想とは、私の境遇に一大打撃を与える何物かの來らざる限り、次第に私をして固陋偏狭こうろうへんきょうならしめ、遂には全く世の中から除外されたものにしてしまうであろう。私は折々反省しようと力めても見る。同時に心柄なる身の末は一体どんなになつてしまふものかと、いっそ放擲ほうてきして自分の身をば他人のようにそのまま敢はかない行末ゆくすえに対して皮肉な一種的好奇心を感じる事すらある。自分で己れの身を抓つかつてこの位力を入れればなるほどこの位痛いものだと独りでいじめて独りで涙ぐんでいるようなものである。或時は表面に恬淡洒脱てんたんしやだつを粧つてゐるが心の底には絶えず果敢いあきらめを宿している。これがために「涙でよごす白粉おしろいのその顔かくす無理な酒」うしろいきおいというような珍しくもない唄うたが、聞く度ごとに私の心には一種特別な刺※を与える。私は後から勢

よく襲い過ぎる自動車の響に狼狽して、そして人に後れてようよろ歩み行く処に、哀を見るのである。

おもてどおりから日の当らない裏道へと逃げ込み、そ
わが一家の興味と共に苦しみ、また得意と共に悲

第二 淫祠

裏町を行こう、横道を歩もう。かくの如く私が好んで日和下駄ひよりげたをカラカラ鳴ならして行く裏う通らどおりにはきまつて淫祠いんしがある。淫祠は昔から今に至るまで政府の庇護を受けたことはない。目こぼしでそのままに打捨てて置かれれば結構、ややともすれば取扱われべきものである。それにもかかわらず淫祠は今なお東京市中数え尽されぬほど沢山ある。私は淫祠を好む。裏町の風景に或趣あもむきを添える上からいつて淫祠は遙に銅像以上の審美的価値があるからである。本所深川の堀割の橋際はしづき、麻布芝辺の極めて急な坂の下、あるいは繁華な町の倉の間、または寺の多い裏町の角などに立っている小さな祠やまた雨ざらしのまゝなる石地蔵いしじぞうには今もつて必ず願掛けがんがけの絵馬や奉納の手拭てぬぐい、或時は線香などが上げてある。現代の教育はいかほど日本人を新しく狡猾こうかつにしようと力めても今だに一部の愚昧ぐまいなる民の心を奪う事が出来ないのであつた。路傍ろばうの淫祠に祈願を籠め欠けたお地蔵様の頸くびに涎よだれかけかけをかけてあげる人たちは娘を芸者に売るかも知れぬ。義賊ぎよくになるかも知れぬ。しかし彼らは他人の私行を新聞に投尽じんや富籤とみくらの僕ぎょく僕こうのみを夢見ているかも知れぬ。しかし彼らは他人の私行を新聞に投

書して復讐を企てたり、正義人道を名として金をゆすつたり人を迫害したりするような文

明の武器の使用法を知らない。

溝祠は大抵その縁起とまたはその効驗のあまりに荒唐無稽な事から、何となく滑稽の趣を伴わすものである。

聖天様には油揚のお饅頭をあげ、大黒様には二股大根、お稻荷様には油揚をあげるのは誰も皆知つてゐる處である。芝日蔭町に鰯をあげるお稻荷様があるかと思えば駒込には炮烙をあげる炮烙地藏というのがある。頭痛を祈つてそれが愈れば御札として炮烙をお地藏様の頭の上に載せるのである。御厩河岸の樅寺には虫歯に効驗のある飴嘗地藏があり、金竜山の境内には塩をあげる塩地藏というのがある。小石川富坂の源覚寺にあるお閻魔様には蒟蒻をあげ、大久保百人町の鬼王様には湿瘡のお札に豆腐をあげる、向島の弘福寺にある「石の姫様」には子供の百日咳を祈つて煎豆を供えるとか聞いている。

無邪氣でそしてまたいかにも下賤ばつたこれら愚民の習慣は、馬鹿囃子にひよつとこの踊または判じ物見たような奉納の絵馬の拙い絵を見るのと同じようにいつも限りなく私の心を慰める。単に可笑しいというばかりではない。理窟にも議論にもならぬ馬鹿馬鹿しい

処に、よく考えて見ると一種物哀れなような妙な心持のする處があるからである。

第三 樹

目に青葉山時鳥初鰯。江戸なる過去の都会の最も美しい時節における情趣は簡単なるこの十七字にいい尽されている。北斎及び広重らの江戸名所絵に描かれた所、これを文字に代えたならば、即ちこの一句に尽きてしまうであろう。

東京はその市内のみなならず周囲の近郊まで日々開けて行くばかりであるが、しかし幸にも社寺の境内、私人の邸宅、また崖地や路のほとりに、まだまだ夥しく樹木を残している。今や工場の煤煙と電車の響とに日本晴の空にも鳶ヒヨロヒヨロの声稀に、雨あがりのふけた夜に月は出ても蜀魂はもう啼かなくなつた。初鰯の味とてもまた汽車と氷との便あるがために昔のようにさほど珍しくもなくなつた。しかし目に見る青葉のみに至つては、毎年花ちる後の新暦五月となれば、下町の川のほとりにも、山の手の坂の上にも、市中到る処その色の美しさにわれらは東京なる都市に対して始めて江戸伝來の固有なる快感を催し得るのである。

東京に住む人、試に初めて袴を着たその日の朝といわば、昼といわば、また夕暮といわば

す、外出の折の道すがら、九段の坂上、神田の明神、湯島の天神、または芝の愛宕山なぞ、隨處の高台に登つて市中を見渡したまえ。輝く初夏の空の下、際限なくつづく瓦屋根の間々に、あるいは銀杏、あるいは椎、檉、柳なぞ、いずれも新緑の色鮮なる梢に、日の光の麗しく照添うさまを見たならば、東京の都市は模倣の西洋造と電線と銅像とのためにいかほど醜くされても、まだまだ全く捨てたものでもない。東京にはどこといつて口にはいえぬが、やはり何となく東京らしい固有な趣があるような気がするであろう。

もし今日の東京に果して都會美なるものがあり得るとすれば、私はその第一の要素をば樹木と水流に俟つものと断言する。山の手を蔽う老樹と、下町を流れる河とは東京市の有する最も尊い宝である。巴里の巴里たる体裁は寺院宮殿劇場等の建築があれば縱え樹と水なくとも足りるであろう。しかるにわが東京においてはもし鬱然たる樹木なくんばかの壯麗なる芝山内の靈廟とても完全にその美とその威儀とを保つ事は出来まい。

庭を作るに樹と水の必要なるはいうまでもない。都會の美觀を作るにもまたこの二つを除くわけには行かない。幸にも東京の地には昔から夥しく樹木があつた。今なお芝田村町に残つている公孫樹の如く徳川氏入国以前からの古木などといふ伝えられている

ものも少くはない。小石川久堅町なる光円寺の大銀杏、また麻布善福寺にある親鸞上人手植の銀杏と称せられるものの如き、いずれも数百年の老樹である。浅草觀音堂のほとりにも名高い銀杏の樹は二株もある。小石川植物園内の大きさの大銀杏は維新後危く伐り倒されようとした斧の跡が残つてゐるためにはかえつて老樹を愛重する人の多く知る処となつてゐる。東京市中にはもしそれほどの故事來歴を有せざる銀杏の大木を探り歩いたならまだなかなか多いことであろう。小石川水道端なる往来の真中に立つてゐる第六天の祠の側、また柳原通りの汚い古着屋の屋根の上にも大きな銀杏が立つてゐる。神田小川町の通にも私が一橋の中学校へ通う頃には大きな銀杏が煙草屋の屋根を貫いて電信柱よりも高く聳えていた。麹町の番町辺牛込御徒町辺を通れば昔は旗本の屋敷らしい邸内の其処此処に銀杏の大樹の立つてゐるのを見る。

銀杏は黄葉の頃神社仏閣の粉壁朱欄と相対して眺むる時、最も日本らしい山水を作す。ここにおいて浅草觀音堂の銀杏はけだし東都の公孫樹中の冠たるものといわねばならない。明和のむかし、この樹下に楊枝店柳屋あり。その美女お藤の姿は今に鈴木春信一筆斎文調らの錦絵に残されてある。

銀杏に比すれば松は更によく神社仏閣と調和して、あくまで日本らしくまた支那らしい風景をつくる。江戸の武士はその邸宅に花ある木を植えず、常磐木の中にも殊に松を尊び愛した故に、元武家の屋敷のあつた処には今もなお緑の色かえぬ松の姿にそぞろ昔を思わせる処が少くない。市ヶ谷の堀端に高力松、高田老松町に鶴亀松がある。広重の絵本『江戸土産』によつて、江戸の都人士が遍く名高い松として眺め賞したるものを挙ぐれば小名木川の五本松、八景坂の鎧掛け松、麻布の一本松、寺島村蓮華寺の末広松、青山竜巖寺の笠松、龜井戸普門院の御腰掛け松、柳島妙見堂の松、根岸の御行の松、隅田川の首尾の松などその他なおいくらもある。しかし大正三年の今日幸に枯死せざるものいくばくぞや。

青山竜巖寺の松は北斎の錦絵『富嶽卅六景』中にも描かれてある。私は大久保の住居より遠くもあらぬ青山を目がけ昔の江戸図をたよりにしてその寺を捜しに行つた事がある。寺は青山練兵場を横切つて兵営の裏手なる千駄ヶ谷の一隅に残つていたが、堂宇は見るかげもなく改築せられ、境内狭しと建てられた貸家に、松は愚か庭らしい閑地さえ見当らなかつた。この近くに山の手の新日暮里といわれて、日暮里の花見寺に比較せられた仙寿院の名園ある事は、これも『江戸名所図絵』で知つてゐる処から、日和下

駄の歩きついでに尋ねあてて見れば、古びた惣門を潜つて登る石段の両側に茶の木の美しく刈込まれたるに辛くも昔を忍ぶのみ。庭は跡方もなく伐開かれ本堂の横手の墓地も申訳らしく僅な地坪を残すばかりであつた。

今日上野博物館の構内に残つている松は寛永寺の旭の松または稚児の松とも称せられたものとやら。首尾の松は既に跡なけれど根岸にはなお御行の松の健なるあり。麻布本村町の曹溪寺には絶江の松、一本榎高野山には独鉢の松と称せられるものが有る。その形古き絵に比べ見て同じようなればいずれも昔のままのものであろう。

柳は桜と共に春来ればこきまぜて都の錦を織成すもの故、市中の樹木を愛するもの決してこれを閑却する訳には行くまい。桜には上野の秋色桜、平川天神の鬱金の桜、麻布笄町長谷寺の右衛門桜、青山梅窓院の拾桜、また今日はありやなしや知らねど名所絵にて名高き渋谷の金王桜、柏木の右衛門桜、あるいはまた駒込吉祥寺の並木の桜の如く、來歴あるものを搜むれば数多あろうが、柳に至つてはこれといつて名前のあるものは殆どないようである。

隋の煬帝長安に顯仁宮を營むや河南に済渠を開き堤に柳を植うる事一千三

百里という。金殿玉樓その影を緑波に流す処春風に柳絮は雪と飛び黄葉は秋風に菲々として舞うさまを想見れば宛ら青貝の屏風七宝の古陶器を見る如き色彩の眩惑を覚ゆる。けだし水の流に柳の糸のなびきゆらめくほど心地よきはない。東都柳原の土手には神田川の流に臨んで、筋違の見附から浅草見附に至るまで人々として柳が生茂つていたが、東京に改められると間もなく堤は取崩され、今見る如き赤煉瓦の長屋に変つてしまつた。土手を取崩したのは『武江年表』によれば明治四年四月またここに供長家を立てたのは明治十二、三年頃である。

柳橋に柳なきは既に柳北先生『柳橋新誌』に「橋以柳為名而不植一株之柳〔橋は柳を以て名と為すに、一株の柳も植えず」」とある。しかして両国橋よりやや川下の溝に小橋あつて元柳橋といわれここに一樹の老柳ありしは柳北先生の同書にも見えまた小林清親翁が東京名所絵にも描かれてある。図を見るに川面籠る朝霧に両国橋薄墨にかすみ渡りたる此方の岸に、幹太き一樹の柳少しく斜になりて立つ。その木蔭に縞の着流の男一人手拭を肩にし後向きに水の流れを眺めている。閑雅の趣自ら画面に溢れ何となく猪牙舟の艤声と鷗の鳴く音さえ聞き得るような心地がする。かの柳はいつの頃枯れ朽ちたのであろう。今は河岸の様子も変り小流も埋立てられてしま

つたので元柳橋の跡も尋ねにくる。

半蔵御門より外桜田の堀あるいはまた日比谷馬場先和田倉御門外へかけての堀端には一斉に柳が植つていて処々に水撒の車が片寄せてある。この柳は恐らく明治になつてから植えたものであろう。広重が東都名勝の錦絵の中外桜田の景を看ても堀端の往来際には一本の柳とても描かれてはいない。土手を下りた水際の柳の井戸の所に唯一とかぶの柳があるばかりである。余の卑見を以てすれば、水を隔てて対岸なる古城の石垣と老松を望まんには、此方の堤に柳あるは眺望を遮りまた眼界を狭くするの嫌あるが故にむしろなきに如くはない。いわんやかかる処に西洋風の楓の如きを植うるにおいてをや。

東京市は頻に西洋都市の外觀に倣わんと欲して近頃この種の楓または橡の類を各区の路傍に植付けたが、その最も不調和なるは赤坂紀の國坂の往来に越す処はあるまい。赤坂離宮のいかにも御所らしく京都らしく見える筋壠に対し異國種の楓の並木は何たる突飛ぞや。山の手の殊に堀近き処の往来には並木の用は更にない。並木の緑なくとも山の手一帯には何処という事なく樹木が目につく。並木は繁華の下町において最も効能がある。銀座駒形人形町通りの柳の木かげに夏の夜の露店賑う有様は、煽風器なくとも天然の涼風自在に吹通う星の下なる一大勧工場にひとしいではないか。

都下の樹木にして以上の外なお有名なるは青山練兵場内のナンジヤモンジヤの木、本ほんご郷うにしかたまち西片町阿部伯爵家の椎、同区弓ゆみちょう町の大おおくすのき樟、芝しばみたはちすか三田蜂須賀侯爵邸の椎などがある。煩わざらわしければ一々述べず。

第四 地図

蝙蝠傘を杖に日和下駄を曳摺りながら市中を歩む時、私はいつも携帯に便なる嘉永板の江戸切図を懷中^{ふところ}にする。これは何も今時出版する石版摺の東京地図を嫌つて殊更昔の木版絵図を慕うというわけではない。日和下駄曳摺りながら歩いて行く現代の街路をば、歩きながら昔の地図に引合せて行けば、おのずから労せずして江戸の昔と東京の今とを目あたり比較対照する事ができるからである。

例えれば牛込弁天町辺は道路取りひろげのため近頃全く面目を異^{こと}にしたが、その裏う通なる小流に今なおその名を残す根来橋^{ねごろばし}という名前なぞから、これを江戸切図に引合せて、私は歩きながらこの辺に根来組同心^{ねごろぐみどうしん}の屋敷のあつた事を知る時なぞ、歴史上の大発見でもしたよう訳もなくむやみと嬉しくなるのである。かような馬鹿馬鹿しい無益な興味^{ほが}の外に、また一つ昔の地図の便利な事は雪月花^{せつげつか}の名所や神社仏閣の位置をば殊更目につきやすいように色摺^{いろざり}にしてあるのみならず時としては案内記のようにこの処より何々まで凡^{およそ}幾^{いく}町^{ちょう}植木屋多しなぞと説明が加えてある事である。凡そ東京の地図に

して精密正確なるは陸地測量部の地図に優るものはなかろう。しかしこれを眺めても何らの興味も起らず、風景の如何をも更に想像する事が出来ない。土地の高低を示す蚰蜒の足のような符号と、何万分の一とか何とかいう尺度一点張りの正確と精密とはかえつて當意即妙の自由を失い見る人をして唯煩雜の思をなさしめるばかりである。見よ不正確なる江戸絵図は上野の如く桜咲く処には自由に桜の花を描き柳原の如く柳ある処には柳の糸を添え得るのみならず、また飛鳥山より遠く曰光筑波の山々を見るを得れば直にこれを雲の彼方に描示すが如く、臨機応変に全く相反せる製図の方式態度を併用して興味津々よく平易にその要領を会得せしめている。この点よりして不正確なる江戸絵図は正確なる東京の新地図よりも遙に直感的また印象的方法に出でたものと見ねばならぬ。現代西洋風の制度は政治法律教育万般のこと尽くこれに等しい。現代の裁判制度は東京地図の煩雜なるが如く大岡越前守の眼力は江戸絵図の如し。更に語を換ゆれば東京地図は幾何学の如く江戸絵図は模様のようである。

江戸絵図はかくて日和下駄蝙蝠傘と共に私の散歩には是非ともなくてはならぬ伴侶となつた。江戸絵図によつて見知らぬ裏町を歩み行けば身は自らその時代にあるが如き心持となる。實際現在の東京中には何処に行くとも心より恍惚として去るに忍びざるほど美麗

なもしくは莊嚴な風景建築に出遇わぬかぎり、いろいろと無理な方法を取りこれによつて
纔に幾分の興味を作出つくりださねばならぬ。然らざれば如何に無聊ぶりようなる閑人かんじんの身にも現今
の東京は全く散歩に堪えざる都會ではないか。西洋文學から得た輸入思想を便りにして、
例えば銀座の角かどのライオンを以て直ちに巴里パリーのカツフエーに擬し帝国劇場を以てオペラに
なぞらえるなぞ、むやみやたらに東京中を西洋風に空想するのも或人にはあるいは有益に
して興味ある方法かも知れぬ。しかし現代日本の西洋式偽文明ぎぶんめいが森永の西洋菓子の如く
女優のダンスの如く無味拙劣なるものと感じられる輩ともがらに對しては、東京なる都會の興味は
勢尚古的退歩的たらざるを得ない。われわれは市ヶ谷外濠いちややそとぼりの埋立工事を見て、いかに
するとも将来の新美觀を予測することの出来ない限り、愛惜あいせきの情は自ら人をしてこの堀
に藕花の馥郁ぐうかふくいくとした昔を思わしめる。

私は四谷見附よつやみつけを出てから迂曲うきょくした外濠つつみの堤つつみの、丁度その曲角まがりかどになつてゐる本村
町ちょうの坂上に立つて、次第に地勢の低くなり行くにつれ、目のどどくかぎり市ヶ谷から牛
込しげめを経て遠く小石川の高台を望む景色をば東京中での最も美しい景色の中に數えている。
市ヶ谷八幡はちまんの桜早くも散つて、茶の木稻荷ちゃいなりの茶の木の生垣いけがき伸び茂る頃、濠端ほりばたづたい
の道すがら、行手ゆくてに望む牛込小石川の高台かけて、緑滴みどりたたる新樹こずえの梢に、ゆらゆらと初夏しょか

雲涼し氣に動く空を見る時、私は何のいわれもなく山の手のこの辺を中心にして江戸の狂歌が勃興した天明時代の風流を思起すのである。『狂歌才蔵集』夏の巻にいわずや、

首夏
しゅか

馬場金埒
ばばきんらち

花はみなおろし大根だいごとなりぬらし鰆かつおに似たる今朝けさの横雲

新樹

紀躬鹿きのみじか

花の山にほひ袋の春過ぎて青葉ばかりとなりにけるかな

更衣
ころもがえ

地形方丸じぎょうかたまる

夏たちて布子の綿はぬきながらたもとにのこる春のはな帯がみ

江戸の東京と改称せられた当時の東京絵図もまた江戸絵図と同じく、わが日和下駄の散歩に興味を添えしむるものである。

私は小石川なる父の家の門札に、第四大区第何小区何町何番地と所書ところがきのしてあつ

たのを記憶している。東京府が今日の如く十五区六郡に区劃されたのは、丁度私の生れた頃のこと。それまでは十一の大区に分たれていたのである。私は柳北の隨筆、芳幾の錦絵、清親の名所絵、これに東京絵図を合せ照してしばしば明治初年の渾沌たる新時代の感覺に触る事を楽しみとする。

市中を散歩しつつこの年代の東京絵図を開き見れば諸処の重立つた大名屋敷は大抵海陸軍の御用地となつてゐる。下谷佐竹の屋敷は調練場となり、市ヶ谷と戸塚村なる尾州侯の藩邸、小石川なる水戸の館第も今日われわれの見る如く陸軍の所轄となり名高き庭苑も追々に踏み荒されて行く。鉄砲洲なる白河樂翁公が御下屋敷の浴恩園は小石川の後楽園と並んで江戸名苑の一に数えられたものであるが、今は海軍省の軍人ががやがや寄集つて酒を呑む俱楽部のようなものになつてしまつた。江戸絵図より目を転じて東京絵図を見れば誰しも仏蘭西革命史を読むが如き感に打たれるであろう。われわれはそれよりも時としては更に深い感慨に沈められるといつてもよい。何故なれば、仏蘭西の市民は政変のために軽々しくヴエルサイユの如きルウブルの如き大なる国民的美術的建築物を壊ちはしなかつたからである。現代官僚の教育は常に孔孟の教を尊び忠孝仁義の道を説くと聞いているが、お茶の水を過る度々「仰高」の二字を掲げ

た大成殿の表門を仰げば、瓦は落ちたるままに雑草も除かず風雨の破壊するがままに任せてある。しかして世人の更にこれを怪しまざるが如きに至つては、われらは唯嘸然たるより外はない。

第五 寺

杖のかわりの蝙蝠傘と共に私が市中散歩の道しるべとなる昔の江戸切絵図を開き見れば江戸中には東西南北到る処に夥しく寺院神社の散在していた事がわかる。江戸の都会より諸侯の館邸と武家の屋敷と神社仏閣を除いたなら残る処の面積は殆どない位であろう。明治初年神仏の区別を分明にして以来殊には近年に至つて市区改正のため仏寺の取扱いとなつたものは尠くない。それにもかかわらず寺院は今なお市中何処という限りもなく、あるいは坂の上崖の下、川のほとり橋の際、到る処にその門と堂の屋根を聳している。一箇所大きい寺のあるあたりには塔中また寺中と呼ばれて小さい寺が幾軒も続いている。そして町の名さえ寺町といわれた処は下谷浅草牛込四谷芝を始め各区に渡つてこれを見出すことが出来る。私は目的なく散歩する中おのずからこの寺の多い町の方へとのみ日和下駄を曳摺つて行く。

上野寛永寺の楼閣は早く兵火に罹り芝増上寺の本堂も祝融の災に遭う事再三。谷中天王寺は僅に傾ける五重塔に往時の名残を留むるばかり。本所羅漢寺の螺堂

も既に頽廃しなが
かくては今日東京市中の寺院にして輪奐の美人目を眩惑せしむるものは僅に浅草の觀
音堂音羽護国寺の山門その他二、三に過ぎない。歴史また美術の上よりして東京市中
の寺院がさしたる興味を牽かないのは当然の事である。私は秩序を立てて東京中の寺院を
歴訪しようという訳でもなく、また強いて人の知らない寺院をさがし出そうと企てている
訳でもない。私は唯古びた貧しい小家つづきの横町なぞを通り過る時、ふと路のほと
りに半ば崩れかかつた寺の門を見付けてああこんな処にこんなお寺があつたのかと思ひな
がら、そつとその門口から境内を窺い、青々とした苔と古池に茂つた水草の花を見るの
が何となく嬉しいというに過ぎない。京都鎌倉あたりの名高い寺々を見物するのとは異つ
て、東京市中に散在したつまらない寺にはまた別種の興味がある。これは単独に寺の建築
やその歴史から感ずる興味ではなく、いわば小説の叙景もしくは芝居の道具立てを見るよ
うな興味に似ている。私は本所深川辺の堀割を散歩する折夕汐の水が低い岸から往
来まで溢れかかつて、荷船や肥料船の笞が貧家の屋根よりもかえつて高く見える間からふ
と彼方に巍然として聳ゆる寺院の屋根を望み見る時、しばしば默阿弥劇中の背景を想い起
すのである。

かくの如き溝泥臭い堀割と腐つた木の橋と肥料船や芥船や棟割長屋なぞから成立つ陰惨な光景中に寺院の屋根を望み木魚と鐘とを聞く情趣は、本所と深川のみならず浅草下谷辺においてもまた變る処がない。私は今近世の社会問題からは全く隔離して仮に単独な絵画的詩興の上からのみかかる貧しい町の光景を見る時、東京の貧民窟には竜動や紐育において見るが如き西洋の貧民窟に比較して、同じ悲惨な中にも何處などくいうべからざる静寂の気が潜んでいるように思われる。尤も深川小名木川から猿江あたりの工場町は、工場の建築と無数の煙筒から吐く煤烟と絶間なき機械の震動とによりて、やや西洋風なる余裕なき悲惨なる光景を呈し来つたが、今然らざる他の場所の貧しい町を窺うに、場末の路地や裏長屋には佛教的迷信を背景にして江戸時代から伝襲し來つたそのままなる日蔭の生活がある。怠惰にして無責任なる愚民の疲労せる物哀れな忍従の生活がある。近來一部の政治家と新聞記者とは各自党派の勢力を張らんがために、これらの裏長屋にまで人権問題の福音を強いようと急り立つてゐる。さればやがて数年の後には法華の団扇太鼓や百万遍の声全く歇み路地裏の水道共用栓の周囲からは人権問題と労働問題の喧しい演説が聞かれるに違ひない。しかし幸か不幸かいまだ全く文明化せられざる今日においてはかかる裏長屋の路地内には時として巫女が梓弓の歌も聞かれ

る。清元も聞かれる。盂蘭盆の燈籠や果敢ない迎火の烟も見られる。彼らが江戸の專制時代から遺伝し来つたかくの如き果敢ない迎火の烟も見られる。彼らが江戸の教育その他のために消滅し、徒に覺醒と反抗の新空氣に触れるに至つたならば、私はその時こそ真に下層社会の悲惨な生活が開始せられるのだ。そして政治家と新聞記者とが十分に私欲を満す時が来るのだと信じてゐる。いつの世にか弱いものの利を得た時代があろう。弱い者が自らその弱い事を忘れ軽々しく浮薄なる時代の声に誘惑されようとするのは、誠に外の見る目も痛ましい限りといわねばならぬ。

私は敢て自分一家の趣味ばかりのために、古寺と荒れた墓場とその附近なる裏屋の貧しい光景とを喜ぶのではない。江戸專制時代の迷信と無智とを伝承した彼らが生活の外形に接して直ちにこれを我が精神修養の一助になさんと欲するのである。實際私は下谷浅草本所深川あたりの古寺の多い溝際の町を通る度々、見るもの聞くものから幾多の教訓と感慨とを授けられるか知れない。私は日進月歩する近世医学の効験を信じないので決してない。電氣治療もラヂウム鉱泉の力をもあながち信用しないのではない。しかし私はここに不衛生なる裏町に住んでいる果敢ない人たちが今なお迷信と煎薬とにその生命を托しこの世を夢と簡単にあきらめをつけている事を思えば、私は医学の進歩しなか

つた時代の人々の病苦災難に対する態度の泰然たると、その生活の簡易なるとに対して深く敬慕の念なきを得ない。およそ近世人の喜び迎えて「便利」と呼ぶものほど意味なきものはない。東京の書生がアメリカ人の如く万年筆を便利として使用し始めて以来文学に科学にどれほどの進歩が見られたであろう。電車と自動車とは東京市民をして能く時間の節儉を実施させているのであろうか。

私はかように好んで下町したまちの寺とその附近の裏町を尋ねて歩くと共にまた山の手の坂道に臨んだ寺をも決して閑却しない。山の手の坂道はしばしばその麓ふもとに聳え立つ寺院の屋根樹木と相俟つて一幅の好画図あいまいまとをつくることがある。私は寺の屋根を眺めるほど愉快なことはない。怪異なる鬼瓦おにがわらを起点として奔流の如く傾斜する寺院の瓦屋根はこれを下から打仰うちあおぐ時も、あるいはこれを上から見下す時も共に言うべからざる爽快の感を催させる。近来日本人は土木の工こうを起すことに力めて欧米各国の建築を模倣せんとしているが、私の目にはいまだ一つとして寺觀の屋根を仰ぐが如き雄大なる美感を起させたものはない。新時代の建築に対するわれわれの失望は啻ただに建築の様式のみに留まらず、建築と周囲の風景樹木等の不調和なる事である。現代人の好んで用ゆる煉瓦の赤色あかいいろと松杉の如き植物の濃く強き緑色りょくしきよくと、光線の烈しき日本固有の藍色らんしきよくの空とは何たる永遠の不調和である。

う。日本の自然は^{ことごと}全く強い色彩を持つてゐる。これにペンキあるいは煉瓦の色彩を対峙せしめるのは余りに無謀といわねばならぬ。^{こころみ}試に寺院の屋根と廊と廻廊を見よ。日本寺院の建築は山に河に村に都に、いかなる処においても、必ずその周囲の風景と樹木と、また空の色とに調和して、ここに特色ある日本固有の風景美を組織してゐる。日本の風景と寺院の建築とは^{りょうりようあいまい}両々相俟つて全く引離すことが出来ないほどに混和してゐる。京都宇治奈良宮島日光等の神社仏閣とその風景との関係は、暫らくこれを日本旅行者の研究に任せて、私はここにそれほど誇るに足らざる我が東京市中のものについてこれを観よう。

不忍の池に泛ぶ弁天堂とその前の石橋とは、上野の山を蔽う杉と松とに対して、または池一面に咲く蓮花に対しても最もよく調和したものではないか。これらの草木とこの風景とを眼前に置きながら、殊更に西洋風の建築または橋梁を作つて、その上から蓮の花や緋鯉や亀の子などを平氣で見てゐる現代人の心理は到底私には解釈し得られぬ処である。浅草觀音堂とその境内に立つ銀杏の老樹、上野の清水堂と春の桜秋の紅葉の対照もまた日本固有の植物と建築との調和を示す一例である。

建築は元より人工のものなれば風土氣候の如何によらず亞細亞の土上に歐羅巴の塔を建てるも容易であるが、天然の植物に至つては人意のままに^{みだり}猥にこれを移し植えることは

出来ない。無情の植物はこの点において最大の芸術家哲学者よりも遙によく己れを知つてゐる。私は日本人が日本の国土に生ずる特有の植物に対しして最少し深厚なる愛情を持つていたなら、たとえ西洋文明を模倣するにしても今日の如く故国の風景と建築とを毀損せず済んだであろうと思つてゐる。電線を引くに不便なりとて遠慮会釀もなく路傍の木を伐り、または昔からなる名所の眺望や由緒のある老樹にも構わずむやみやたらに赤煉瓦の高い家を建てる現代の状態は、實に根柢より自国の特色と伝來の文明とを破却した暴挙といわねばならぬ。この暴挙あるがために始めて日本は二十世紀の強国になつたというならば、外觀上の強国たらんがために日本はその尊き内容を全く犠牲にしてしまつたものである。

私は上野博物館の門内に入る時、表慶館の傍に今なお不思議にも余命を保つてゐる老松の形と赤煉瓦の建築とを対照して、これが日本固有の貴重なる古美術を収めた宝庫かと誠に奇異なる感に打たれる。日本橋の大通を歩いて三井三越を始めこの辺に競うて立つアメリカ風の高い商店を望むことに、私はもし東京市の実業家が眞に日本橋といい駿河町と呼ぶ名称の何たるかを知りこれに対する伝説の興味を感じていたなら、繁華な市中からも日本晴の青空遠く富士山を望み得たという昔の眺望の幾分を保存させたで

あらうと愚にもつかぬ事を考へ出す。私は外濠の土手に残つた松の木をば雪の朝月の夕、折々の季節につれて、現今の中第一の風景として悦ぶにつけて、近頃よつやみつけうち築された大きな赤い耶蘇の学校の建築をば心の底から憎まねばならぬ。日常かかる不調和な市街の光景に接した目を転じて、一度市内に残された寺院神社を訪ねばいかにつまらぬ堂宇もまたいかに狭い境内も私の心には無限の慰藉を与へずにはいない。

私は市中の寺院や神社をたずね歩いて最も幽邃の感を与へられるのは、境内に進入して近く本堂の建築を打仰ぐよりも、路傍に立つ惣門を潜り、彼方なる境内の樹木と本堂鐘樓等の屋根を背景にして、その前に聳える中門または山門をば、長い敷石道の此方から遠く静に眺め渡す時である。浅草の觀音堂について論すれば雷門は既に焼失せてしまつたが今なお残る二王門をば仲店の敷石道から望み見るが如き光景である。あるいはまた麻布広尾橋の袂より一本道の端れに祥雲寺の門を見る如き、あるいは芝大門の辺より道の両側に塔中の寺々甍を連ねるその端れに当つて遙に朱塗の楼門を望むが如き光景である。私はかくの如き日本建築の遠景についてこれをば西洋で見た巴リーがいせんもんたの凱旋門その他の眺望に比較すると、氣候と光線の關係故か、唯何とはなしに日本の遠景は平たく見えるような心持がする。この点において歌川豊春らの描いた浮絵の遠

景木板画にはどうかすると眞によくこの日本的感情を示したものがある。

私は適度の距離から寺の門を見る眺望と共にまた近寄つて扉の開かれた寺の門をそのままの額縁にして境内を窺い、あるいはまた進み入つて境内よりその門外を顧る光景に一段の画趣を覚える。既に『大窪だより』その他の拙著において私は寺の門口からその内外を見る景色の最も面白きは浅草の二王門及び隨身門である事を語つた。然れば今更ここにその興味を繰返して述べる必要はない。

寺の門はかくの如く本堂の建築とは必ず適度の距離に置かれ、境内に入るものをしてその眺望よりして自ら敬虔の心を起さしめるように造られてある。寺の門は宛ら西洋管絃樂の序曲の如きものである。最初に惣門ありその次に中門あり然る後幽邃なる境内あつてここに始めて本堂が建てられるのである。神社について見るもまず鳥居あり次に樓門あり、これを過ぎて始めて本殿に到る。皆相應の距離が設けられてある。この距離あつて始めて日本の寺院と神社の威厳が保たれるのである。されば寺院神社の建築を美術として研究せんと欲するものは、単独にその建築を観るに先立つて、広く境内の敷地全体の設計並びにその地勢から觀察して行かねばならぬ。これ既にゴンスやミジョンの如き日本美術の研究者また旅行者の論ずるが如く、日本寺院の西洋と異なる所以である。西洋の

寺院は大抵単独に路傍に屹立しているのみであるが、日本の寺院に至つては如何なる小さな寺といえども皆門を控えている。芝増上寺の楼門をしてかくの如く立派に見せようがためにはその門前なる広い松原が是非とも必要になつて来るであろう。神社の山門の甚だ幽邃なる理由を知らんには、その周囲なる杉の木立のみならず、前に控えた高い石段の有無をも考えねばなるまい。日本の神社と寺院とはその建築と地勢と樹木との対比^{まことに}複雑なる綜合美術である。されば境内の老樹にしてもしその一株を枯死せしむれば、全体より見て容易に修繕しがたき破損を來さしめた訳である。私はこの論法により更に一步を進めて京都奈良の如き市街は、その貴重なる古社寺の美術的効果に対して広く市街全体をもその境内に同じきものとして取扱わねばならぬと思つてゐる。即ちかかる市街の停車場旅館官衙学校等は、その建築の体裁も出来得る限りその市街の生命たる古社寺の風致と歴史とを傷けぬよう、常に慎重なる注意を払うべき必要があつた。しかるに近年見る所の京都の道路家屋並に橋梁の改築工事の如きは全く吾人の意表に出でたものである。日本いかに貧困たりとも京都奈良の二旧都をそのままに保存せしめたりとて、もしそれだけの埋合せとして新領土の開拓に努める処あらば、一国全体の商工業より見て、さしたる損害を來す訳でもあるまい。眼前の利にのみ齷齪^{あくせく}して世界に二つとない自國の

宝の値踏をする暇さえないと、あまりに小国人の面目を活躍させ過ぎた話である。思わず畠違いへ例の口癖とはいながら愚痴が廻り過ぎた。世の中はどうでも勝手に棕櫚。私は自分勝手に唯一人日和下駄を曳きずりながら黙つて裏町を歩いていればよかつたのだ。議論はよそう。皆様が御退屈だから。

第六 水 附渡船

仮蘭西人エミル・マンユの著書『都市美論』の興味ある事は既にわが隨筆『大窪だより』の中に述べて置いた。エミル・マンユは都市に対する水の美を論ずる一章において、広く世界各国の都市とその河流及び江湾の審美的関係より、更に進んで運河 沼 泽 噴水 橋 梁 等の細節にわたつてこれを説き、なおその足らざる処を補わんがために水流に映ずる市街燈火の美を論じている。

今試に東京の市街と水との審美的関係を考うるに、水は江戸時代より繼續して今日においても東京の美觀を保つ最も貴重なる要素となつてゐる。陸路運輸の便を欠いていた江戸時代にあつては、天然の河流たる隅田川とこれに通ずる幾筋の運河とは、いうまでもなく江戸商業の生命であつたが、それと共に都會の住民に対しては春秋四季の娯楽を与えるために不朽の価値ある詩歌絵画をつくらしめた。しかるに東京の今日市内の水流は單に運輸のためのみとなり、全く伝來の審美的価値を失うに至つた。隅田川はいうに及ばず神田のお茶の水本所の豎川を始め市中の水流は、最早や現代のわれわれには昔の人が船

宿の桟橋から猪牙船に乗つて山谷に通い柳島に遊び深川に戯れたような風流を許さず、また釣や網の娯楽をも与えなくなつた。今日の隅田川は巴里におけるセーヌ河の如き美麗なる感情を催さしめず、また紐育のホドソン、倫敦のテエムスに対するが如く偉大なる富國の壯觀をも想像させない。東京市の河流はその江湾なる品川の入海と共に、さして美しくもなく大きくもなくまたさほどに繁華でもなく、誠に何方つかずの極めてつまらない景色をなすに過ぎない。しかしそれにもかかわらず東京市中の散歩において、今日なお比較的興味あるものはやはり水流れ船動き橋かかる処の景色である。

東京の水を論ずるに当つてまずこれを区別して見るに、第一は品川の海湾、第二は隅田川中川六郷川の如き天然の河流、第三は小石川の江戸川、神田の神田川、王子の音無川の如き細流、第四は本所深川日本橋京橋下谷浅草等市中繁華の町に通ずる純然たる運河、第五は芝の桜川、根津の藍染川、麻布の古川、下谷の忍川の如きその名のみ美しき溝渠、もしくは下水、第六は江戸城を取巻く幾重の濠、第七は不忍池、角筈十二社の如き池である。井戸は江戸時代にあつては三宅坂側の桜ヶ井、清水谷の柳の井、湯島の天神の御福の井の如き、古来江戸名所の中に数えられたものが多かつたが、東京になつてから全く世人に忘れられ所在の地さえ大抵は不明とな

つた。

東京市はかくの如く海と河と堀と溝と、仔細に観察し来ればそれら幾種類の水——即ち流れ動く水と淀んで動かぬ死したる水とを有する頗変化に富んだ都會である。まず品川の入海いりうみを眺めんにここは目下なお築港の大工事中であれば、将来如何なる光景を呈し来るや今より予想する事はできない。今日までわれわれが年久しく見馴れて來た品川の海は僅に房州ほうしゆう通がよいの蒸氣船と円ツまるこい達磨船だるませんを曳動ひきうごかす曳船の往来する外、東京なる大都會の繁榮とは直接にさしたる関係もない泥海どろうみである。潮の引く時泥土は目のとどく限り引続いて、岸近くには古下駄に炭俵すみだわら、さては皿小鉢や椀のかけらに船虫のうようよと這寄るばかり。この汚い溝のような沼地を掘返しながら折々は沙蚕取りさなぐれとりが手桶を下げて沙蚕さなぐれを取りつて沙蚕さなぐれを取つてゐる事がある。遠くの沖には彼方此方に澪や粗朶みおが突立つてゐるが、これさえ岸より眺むれば塵芥ぢりあくたかと思われ、その間に泛ぶ牡蠣舟かきぶねや苔取こぶねの小舟も今は唯強いて江戸の昔を追回ついかいしようとする人の眼にのみ聊かの風趣を覚えさせるばかりである。かく現代の首府に對しては實用にも裝飾にも何にもならぬこの無用なる品川湾の眺望は、彼の八ツ山の沖に並んで泛ぶこれも無用なる御台場と相俟つて、いかにも過去つた時代の遺物らしく放棄された悲しい趣を示してゐる。天気のよい時白帆しらほや浮雲うきぐもと共に望み得ら

れる安房上総の山影あわかずささんえい とても、最早や今日の都会人には彼の花川戸助六はなかわどすけろく が台詞せりふにも読込まれているような爽快な心持を起させはしない。品川湾の眺望に對する興味は時勢と共に全く湮滅いんめつ してしまつたにかかわらず、その代りとして興るべき新しい風景に對する興味は今日においてはいまだ成立たずにいるのである。

芝浦しばうら の月見も高輪たかなわ の二十六夜待にじゅうろくやまち も既になき世の語草かたりぐさ である。南品の風流を伝えた樓台ろうだい も今は唯不潔なる娼家しょうか に過ぎぬ。明治二十七、八年頃江見水蔭子えみすいいんし がこの地の娼婦を材料として描いた小説『泥水清水』どろみずしみず の一篇は當時硯友社の文壇に傑作として批評されたものであつたが、今よりして回想すれば、これすら既に遠い世のさまを描いた物語のような気がしてならぬ。

かく品川の景色の見捨てられてしまつたのに反して、荷船の帆柱と工場の煙筒の叢立むらが つた大川口おおかわぐち の光景は、折々西洋の漫画に見るような一種の趣味に照して、この後とも案外長く或一派の詩人を悦ばす事が出来るかも知れぬ。木下奎太郎、北原白秋諸家の或時期の詩篇には築地の旧居留地から月島永代橋つきしまえいたいばし あたりの生活及びその風景によつて感興を発したらしく思われるものが渺くなかつた。全く石川島いしかわじま の工場を後にして幾艘となく帆柱を連ねて碇泊ていはく するさまざまな日本風の荷船や西洋形の帆前船ほまえせん を見ればおのずと

特種の詩情が催される。私は永代橋を渡る時活動するこの河口の光景に接するやドオデエがセエン河を往復する荷船の生活を描いた可憐なる彼の『ラ・ニベルネエズ』の一小篇を思出すのである。今日の永代橋には最早や辰巳の昔を回想せしむべき何物もない。さるが故に、私は永代橋の鉄橋をばかえつてかの吾妻橋や両国橋の如くに醜くいとは思わない。新しい鉄の橋はよく新しい河口の風景に一致している。

私が十五、六歳の頃であった。永代橋の河下には旧幕府の軍艦が一艘商船学校の練習船として立腐れのままに繫がっていた時分、同級の中学生といつものように浅草橋の船宿から小舟を借りてこの辺を漕ぎ廻り、河中に碇泊している帆前船を見物して、こわい顔した船長から椰子の実を沢山貰つて帰つて来た事がある。その折私たちは船長がこの小さな帆前船を操つて遠く南洋まで航海するのだという話を聞き、全くロビンソンの冒険談を読むような感に打たれ、将来自分たちもどうにかしてあのような勇猛なる航海者になりたいと思つた事があつた。

やはりその時分の話である。築地の河岸の船宿から四梃艤のボオトを借りて遠く千住の方まで漕ぎ上つた帰り引汐につれて佃島の手前まで下つて来た時、突然向か

ら帆を上げて進んで来る大きな高瀬船に衝突し、幸いに一人も怪我はしなかつたけれど、借りたボオトの小舷こべりをば散々に破してしまつた上に櫂かいを一本折つてしまつた。一同は皆親がかりのものばかり、船遊びをする事も家うちへは秘密にしていた位なので、私たちは船宿へ帰つて万一破損の弁償金を請求されたらどうしようかとその善後策を講ずるために、佃島の砂の上にボオトを引上げ浸水をかい出しながら相談をした。その結果夜暗くなつてから船宿の桟橋へ船を着け、宿の亭主が舷ふなべりの大破損に氣のつかない中一同うち一目散いちもくさんに逃げ出しがよかろうという事になつた。一同はお浜御殿はまごてんの石垣下まで漕入こぎいつてから空腹を我慢しつつ水の上の全く暗くなるのを待ち船宿の桟橋へ上るが否や、店に預けて置いた手荷物を奪うように引ひつ掴つかみ、めいめい後あとを見ず、ひた走りに銀座の大通りまで走つて、漸やつと息をついた事があつた。その頃には東京府府立の中学校が築地にあつたのでその辺の船宿では釣船の外にボオトをも貸したのである。今日築地の河岸を散歩しても私ははつきりとその船宿の何処にあつたかを確めることが出来ない。わずか二十年前ぜんなる我が少年時代の記憶の跡すら既にかくの如くである。東京市街の急激なる変化はむしろ驚くの外はない。

大川筋おおかわすじ

一帯の風景について、その最も興味ある部分は今述べたように永代橋河口えいたいばしかこうの

眺望を第一とする。吾妻橋両国橋等の眺望は今日の處あまりに不整頓にして永代橋におけるが如く感興を一所に集注する事が出来ない。これを例するに浅野セメント会社の工場と新大橋の向に残る古い火見櫓の如き、あるいは浅草蔵前の電燈会社と駒形堂の如き、國技館と回向院の如き、あるいは橋場の瓦斯タンクと真崎稻荷の老樹の如き、それら工業的近世の光景と江戸名所の悲しき遺蹟とは、いずれも個々別々に私の感想を錯乱させるばかりである。されば私はかくの如く過去と現在、即ち廢頽と進歩との現象のあまりに甚しく混雜している今日の大川筋よりも、深川小名木川より猿江裏の如くあたりは全く工場地に変形し江戸名所の名残も容易くは尋ねられぬほどになつた処を選ぶ。大川筋は千住より両国に至るまで今日においてはまだまだ工業の侵略が緩漫に過ぎてゐる。本所小梅から押上辺に至る辺も同じ事、新しい工場町としてこれを眺めようとする時、今となつてはかえつて柳島の妙見堂と料理屋の橋本とが目ざわりである。

運河の眺望は深川の小名木川辺に限らず、いずこにおいても隅田川の両岸に対するよりも一体にまとまつた感興を起させる。一例を挙ぐれば中洲と箱崎町の出端との間に深

く突入つてゐる堀割はこれを箱崎町の永久橋または菖蒲河岸の女橋から眺めやるに水はあたかも入江の如く無数の荷船は部落の觀をなし薄暮風收まる時競つて炊烟を棚曳かすさま正に江南沢國の趣をなす。凡て溝渠運河の眺望の最も變化に富みかつ活氣を帶びる処は、この中洲の水のように彼方此方から幾筋の細い流れがやや広い堀割を中心にして一個所に落合つて来る処、もしくは深川の扇橋の如く、長い堀割が互に交叉して十字形をなす処である。本所柳原の新辻橋、京橋八丁堀の白魚橋、靈岸島の靈岸橋あたりの眺望は堀割の水のあるいは分れあるいは合する処、橋は橋に接し、流れは流れと相激し、ややともすれば船は船に突当ろうとしている。私はかかる風景の中日本橋を背にして江戸橋の上より菱形をなした広い水の片側には荒布橋つづいて思案橋、片側には鎧橋を見る眺望をば、その沿岸の商家倉庫及び街上橋頭の繁華雜沓と合せて、東京市内の堀割の中に最も偉大なる壯觀を呈する処となす。殊に歳暮の夜景の如き橋上を往来する車の灯は沿岸の燈火と相乱れて徹宵水の上に揺き動く有様銀座街頭の燈火より遙に美麗である。

堀割の岸には处处に物揚場がある。市中の生活に興味を持つものには物揚場の光景もまたしばし杖を留むるに足りる。夏の炎天神田の鎌倉河岸、牛込揚場の河岸などを

通れば、荷車の馬は馬方と共につかれて、河添の大きな柳の木の下に居眠りをしている。砂利や瓦や川土を積み上げた物蔭にはきまつて牛飯やすいとんの露店が出ている。時には氷屋も荷を卸している。荷車の後押しをする車力の女房は男と同じような仕度をして立ち働き、その赤児をば捨児のように砂の上に投出していると、その辺には痩せた鶏が落ちこぼれた餌をもりつくして、馬の尻から馬糞の落ちるのを待つている。私はこれららの光景に接すると、必北斎あるいはミレエを連想して深刻なる絵画的写実の感興を誘い出され、自ら絵事の心得なき事を悲しむのである。

以上河流と運河の外なお東京の水の美に関しては処々の下水が落合つて次第に川の如き流をなす溝川の光景を尋ねて見なければならない。東京の溝川には折々可笑しいほど事実と相違した美しい名がつけられてある。例えば芝愛宕下なる青松寺の前を流れる下水を昔から桜川と呼びまた今日では全く埋尽された神田鍛冶町の下水を逢あいそ初川、橋場總泉寺の裏手から真崎へ出る溝川を思川、また小石川金剛寺坂下の下水を人參川と呼ぶ類である。江戸時代にあつてはこれらの溝川も寺院の門前や大名屋敷の堀外など、幾分か人の目につく場所を流れていたような事から、土地の人

はその名の示すが如き特殊の感情を与えたものかも知れない。しかし今日の東京になつては下水を呼んで川となすことすら既に滑稽なほど大袈裟である。かくの如くその名とその実との相伴わざる事は独り下水の流れのみには留まらない。江戸時代とまたその以前からの伝説を継承した東京市中各処の地名には少しく低い土地には千仞の幽谷を見るようすに地獄谷麹町にあり千日谷四谷鮫ヶ橋にあり我善坊ヶ谷麻布にありなぞいう名がつけられ、また少しく小高い処は直ちに峨々たる山岳の如く、愛宕山道灌山待乳山などと呼ばれている。島なき場所も柳島三河島向島なぞと呼ばれ、森なき処にも鳥森、鷺の森の如き名称が残されてある。始めて東京へ出て来た地方の人は、電車の乗換場を間違えたり市中の道に迷つたりした腹立まぎれ、かかる地名の虚偽を以てこれまた都會の憎むべき悪風として觀察するかも知れない。

溝川は元より下水に過ぎない。『紫の一本』にも芝の宇田川を説く條に、「溜池のやしき屋舗の下水落ちて愛宕の下より増上寺の裏門を流れて爰に落る。愛宕の下、屋敷々々の下水も落ち込む故宇田川橋にては少しの川のやうに見ゆれども水上はかくの如し。」とある通り、昔から江戸の市中には下水の落合つて川をなすものが少くなかった。下水の落

合つて川となつた流れは道に沿い坂の麓を廻り流れ流れて行く中に段々広くなつて、天然の河流または海に落ちむあたりになるとどうやらこうやら伝馬船でんませんを通わせる位になる。

麻布の古川は芝山内しばさんないの裏手近くその名も赤羽川あかばねがわと名付けられるようになると、山内の樹木と五重塔ごじゅうとうの聳ゆる籠を巡つて舟楫しゆうしうの便を与うるのみか、紅葉の頃は四条派よしの絵にあるような景色を見せる。王子の音無川おうじおとなしがわも三河島みかわしまの野を潤したその末は山谷堀やほりとなつて同じく船を泛うかべる。

下水と溝川はその上に架つた汚い木橋きばしや、崩れた寺の堀、枯れかかつた生垣いけがき、または貧しい人家の様さまと相対して、しばしば憂鬱なる裏町の光景を組織する。即ち小石川柳町こいしかわやなぎちの小流こながれの如き、本郷なる本妙寺坂ほんじょうじざか下の溝川の如き、団子坂だんござか下から根津に通ずる藍染川あいそめがわの如き、かかる溝川流るる裏町は大雨の降る折といえば必ず雨潦うりょうの氾濫に災害を被る處である。溝川が貧民窟に調和する光景の中うち、その最も悲惨なる一例を挙げれば麻布の古川橋から三之橋さんのはしに至る間の川筋であろう。ぶりき板の破片や腐つた屋根板で葺いたあばら家は数町に渡つて、左右から濁水だくすいさしさを挟んで互にその傾いた廂を向い合せている。春秋時候の変り目に降りつづく大雨の度たびごとに、芝と麻布の高台から滝のように落ちて来る濁水は忽ち両岸に氾濫して、あばら家の腐つた土台からやがては破れた置たたみまで

を浸してしまう。雨が霽ると水に濡れた家具や夜具蒲団を初め、何とも知れぬ汚らしい
艦樓の数々は旗か幟のように両岸の屋根や窓の上に曝し出される。そして真黒な裸体の男
や、腰巻一つの汚い女房や、または子供を背負つた児娘までが笊や籠や桶を持って濁流
の中に入りつ乱れつ富裕な屋敷の池から流れて来る雜魚を捕えようと急つてゐる有様、通
りがかりの橋の上から眺めやると、雨あがりの晴れた空と日光の下に、或時はかえつて一
種の壯觀を呈してゐる事がある。かかる場合に看取せられる壯觀は、丁度軍隊の整列もし
くは舞台における並大名を見る時と同様で一つ一つに離して見れば極めて平凡なものも
のも集合して一団をなす時には、此処に思いがけない美麗と威嚴とが形造られる。古川
橋から眺める大雨の後の貧家の光景の如きもやはりこの一例であろう。

江戸城の濠はけだし水の美の冠たるもの。しかしこの事は叙述の筆を以てするよりもむ
しろ絵画の技を以てするに如くはない。それ故私は唯一代官町の蓮池御門、三宅坂
下の桜田御門、九段坂下の牛ヶ淵等古来人の称美する場所の名を挙げるに留めて置
く。

池には古来より不忍池の勝景ある事これも今更説く必要がない。私は毎年の秋竹の
たけのいけ

台に開かれる絵画展覧会を見ての帰り道、いつも市氣満々たる出品の絵画よりも、向ヶ岡の夕陽敗荷の池に反映する天然の絵画に対して杖を留むるを常とした。そして現代美術の品評よりも独り離れて自然の画趣に恍惚とする方が遙に平和幸福である事を知るのである。

不忍池は今日市中に残された池の中の最後のものである。江戸の名所に数えられた鏡ヶ池や姥ヶ池は今更尋ねよしの由もない。浅草寺境内の弁天山の池も既に町家となり、また赤坂の溜池も跡方なく埋めつくされた。それによつて私は将来不忍池もまた同様の運命に陥りはせぬかと危むのである。老樹鬱蒼として生茂る山王の勝地は、その翠緑を反映せしむべき麓の溜池あつて初めて完全なる山水の妙趣を示すのである。もし上野の山より不忍池の水を奪つてしまつたなら、それはあたかも両腕をもぎ取られた人形に等しいものとなるであろう。都會は繁華となるに従つて益々自然の地勢から生ずる風景の美を大切に保護せねばならぬ。都會における自然の風景はその都市に対して金力を以て造る事の出来ぬ威厳と品格とを帯させるものである。巴里にも倫敦にもあんな大きな、そしてあのように香高い蓮の花の咲く池は見られまい。

都会の水に関する最後に渡船の事を一言したい。渡船は東京の都市が漸次整理されて行くにつれて、即ち橋梁の便宜を得るに従つてやがては廃絶すべきものであろう。江戸時代に溯つてこれを見れば元禄九年に永代橋が懸つて、大渡しと呼ばれた大川口の渡場は『江戸鹿子』や『江戸爵』などの古書にその跡を残すばかりとなつた。それと同じように御厩河岸の渡し鎧の渡しを始めとして市中諸所の渡場は、明治の初年架橋工事の竣成と共にいざれも跡を絶ち今はただ浮世絵によつて当時の光景を窺うばかりである。

しかし渡場はいまだ悉く東京市中からその跡を絶つた訳ではない。両国橋を間にしてその川上に富士見の渡、その川下に安宅の渡が残つてゐる。月島の埋立工事が出来ると共に、築地の海岸からは新に曳船の渡しが出来た。向島には人の知る竹屋の渡しがあり、橋場には橋場の渡しがある。本所の豊川、深川の小名木川辺の川筋には荷足船で人を渡す小さな渡場が幾個所もある。

鉄道の便宜は近世に生れたわれわれの感情から全く羈旅とよぶ純朴なる悲哀の詩情を奪はいた如く、橋梁はまた遠からず近世の都市より渡船なる古めかしい緩かな情趣を取り去ってしまうであろう。今日世界の都會中渡船なる古雅の趣を保存している處は日本の東京

のみではあるまい。米国の都市には汽車を渡す大仕掛けの渡船があるけれど、竹屋の渡しの如く、河かわ水みずに洗あらいだ出された木目もくめの美しい木造きづくりりの船、檻かしの艤いろ、竹の棹さおを以てする絵の如き渡船はない。私は向島の三みめぐり廻わいや白鬚しらひげに新しく橋梁の出来る事を決して悲しむ者ではない。私は唯両国橋の有無ゆうむにかかるらずその上下かみしもに今なお渡場が残されてある如く隅田川その他の川筋にいつまでも昔のままの渡船のあらん事を希こいねがうのである。

橋を渡る時欄干らんかんの左右からひろびろした水の流れを見る事を喜ぶものは、更に岸を下くだつて水上に浮び鷗かもめと共にゆるやかな波に揺られつつ向の岸に達する渡船の愉快を容易に了解する事が出来るであろう。都会の大道には橋梁の便あつて、自由に車を通ずるにかかるらず、殊更岸に立つて渡船を待つ心は、丁度表通に立派なアスファルト敷の道路あるにかかるらず、好んで横町や路地の間道かんどうを抜けて見る面白さとやや似たものであろう。渡船は自動車や電車に乗つて馳せ廻る東京市民の公生涯こうしょうがいとは多くの関係を持たない。しかし渡船は時間の消費をいとわず重い風呂敷包ふろしきづつみなぞ背負つてテクテクと市中しちゅうを歩いている者どもには大なる休息だいを与え、またわれらの如き閑散なる遊歩者に向つては近代の生活に味われない官覚の慰安を覚えさせる。

木で造つた渡船と年老いた船頭とは現在並びに将来の東京に対して最も尊い骨董こつとうの一

つである。古樹と寺院と城壁と同じくあくまで保存せしむべき都市の宝物である。都市は個人の住宅と同じくその時代の生活に適當せしむべく常に改築の要あるは勿論のことである。しかしあれわれは人の家を訪うた時、座敷の床の間にその家伝來の書画を見れば何となく奥床おくゆか おのづか しく自ら主人に対して敬意を深くする。都會もその活動的ならざる他の一面において極力伝來の古蹟を保存し以てその品位たま たも を保たしめねばならぬ。この点よりして渡船の如きはひとりわれら一個の偏狭なる退歩趣味からのみこれを論すべきものではあるまい。

第七 路地

鉄橋と渡船との比較からここに思起されるのは立派な表通りの街路に対してその間々に隠れている路地の興味である。擬造西洋館の商店並び立つ表通は丁度電車の往来する鉄橋の趣に等しい。それに反して日陰の薄暗い路地はあたかも渡船の物哀にして情味の深きに似ている。式亭三馬が戯作『浮世床』の挿絵に歌川国直が路地口のさまを描いた図がある。歌川豊国はその時代享和二年のあらゆる階級の女の風俗を描いた絵本『時勢粧』の中に路地の有様を写している。路地はそれらの浮世絵に見る如く今も昔と変りなく細民の棲息する処、日の当った表通からは見る事の出来ない種々なる生活が潜みかくれている。佗住居の果敢さもある。失敗と挫折と窮迫との最終の報酬なる怠惰と無責任との樂境もある。すいた同士の新世帶もあれば命掛けなる密通の冒險もある。されば路地は細く短しといえども趣味と変化に富むことあたかも長編の小説の如しといわれるであろう。

今日東京の表通は銀座より日本橋通は勿論上野の広小路浅草の駒形通りを始め

として到いたるところ処西洋まがいの建築物とペンキ塗の看板瘦せ衰えた並樹さては処嫌わざ無遠慮に突立つてゐる電信柱とまた目まぐるしい電線の網目のために、いうまでもなく静寂の美を保つていた江戸市街の整頓を失い、しかもなおいまだ音律的な活動の美を有する西洋市街の列に加わる事も出来ない。さればこの中途半端の市街に対しては、風雨雪月夕等の助けを借りにあらずんば到底芸術的感興を催す事ができない。表通を歩いて絶えず感ずるこの不快と嫌惡の情とは一層私をしてその陰にかくれた路地の光景に興味を持たせる最大の理由になるのである。

路地はどうかすると横町同様人力車の通れるほど広いものもあれば、土蔵または人家の狭間になつて人一人やつと通れるかどうかと危まれるものもある。勿論その住民の階級職業によつて路地は種々異つた体裁をなしている。日本橋際の木原店は軒並飲食店の行燈が出てゐる処から今だに食傷新道の名がついてゐる。吾妻橋の手前東橋亭とよぶ寄席の角から花川戸の路地に這入れば、ここは芸人や芝居者また遊芸の師匠などの多い処から何となく猿若町の新道の昔もかくやと推量せられる。いつも夜店の賑う八丁堀北島町の路地には片側に講釈の定席、片側には娘義太夫の定席が向合つてゐるので、堂摺連の手拍子は毎夜張扇の響に打交る。両

國の広小路に沿うて石を敷いた小路には小間物屋袋物屋煎餅屋など種々なる小売店の賑う有様、正しく屋根のない勧工場の廊下と見られる。横山町辺のとある路地の中にはやはり立派に石を敷詰めた両側ともに長門筒袋物また筆なぞ製している問屋ばかりが続いているので、路地一帯が倉庫のように思われる処があつた。芸者家の許可された町の路地はいうまでもなく艶らしい限りであるが、私はこの種類の中では新橋柳橋の路地よりも新富座裏の一角をばそのあたりの堀割の夜景とまた芝居小屋の背面を見る様子とから最も趣のあるように思つてゐる。路地の最も長くまた最も錯雜して、あたかも迷宮の観あるは葭町の芸者家町であろう。路地の内に蔵造の質屋もあれば有徳な人の隠宅らしい板塀も見える。わが拙作小説『すみだ川』の篇中にはかかる路地の或場所をばその頃見たままに写生して置いた。

路地の光景が常に私をしてかくの如く興味を催さしむるは西洋銅版画に見るが如きあるいはわが浮世絵に味うが如き平民的画趣ともいふべき一種の芸術的感興に基くものである。路地を通り抜ける時試に立止つて向うを見れば、此方は差迫る両側の建物に日を遮られて湿っぽく薄暗くなつてゐる間から、彼方遙に表通の一部分だけが路地の幅だけにくつきり限られて、いかにも明るそうに賑かそうに見えるであろう。殊に表通りの向側に日の光が

照渡つている時などは風になびく柳の枝や広告の旗の間に、往来の人の形が影の如く現れては消えて行く有様、丁度燈火に照された演劇の舞台を見るような思いがする。夜になつて此方は真暗な路地裏から表通の燈火を見るが如きはいわずともまた別様の興趣がある。川添いの町の路地は折々忍返しのびがえしせつをつけたその出口から遙に河岸通のみならず、併せて橋の欄干や過行く荷船の帆の一部分を望み得させる事がある。かくの如き光景はけだし逸品中の逸品である。

路地はいかに精密なる東京市の地図にも決して明には描き出されていない。どこから這あきらか入つて何處へ抜けられるか、あるいは何處へも抜けられず行止ゆきどまりになつてゐるものか否か、それはけだしその路地に住んで始めて判然するので、一度や二度通り抜けた位では容易に判明すべきものではない。路地には往々江戸時代から伝承し來つた古い名称がある。即ち中橋なかばしの狩野新道かのうじんみちというが如き歴史的由緒あるものも尠すくなくない。しかしそれとてもその土地に住すみぶる古したものとの間にのみ通用されべき名前であつて、東京市の市政が認めて以て公の町名となしたものは恐らくは一つもあるまい。路地は即ちあくまで平民の間にのみ存在し了解されているのである。犬や猫が垣の破れや塀の隙間を見出して自然とその種属ばかりに限られた通路を作ると同じように、表通りに門戸もんこを張ることの出来ぬ平民は大

道と大道との間に自ら彼らの棲息に適當した路地を作つたのだ。路地は公然市政によつて
 経営されたものではない。都市の面目裁品格とは全然関係なき別天地である。されば
 貴人の馬車富豪の自動車の地響に午睡の夢を驚かさる恐れなく、夏の夕は格子戸の外
 に裸体で涼む自由があり、冬の夜は置炬燵に隣家の三味線を聞く面白さがある。新聞買
 わずとも世間の噂は金棒引の女房によつて仔細に伝えられ、喘息持の隠居が咳嗽は頬
 まざるに夜通し泥棒の用心となる。かくの如く路地は一種いいがたき生活の悲哀の中に自
 からまた深刻なる滑稽の情趣を伴わせた小説的世界である。しかして凡てこの世界のあく
 まで下世話なる感情と生活とはまたこの世界を構成する格子戸、溝板、物干台、木戸
 口、忍返などいう道具立と一致している。この点よりして路地はまた渾然たる芸術的
 調和の世界といわねばならぬ。

第八 閑地

市中しちゅうの散歩に際して丁度前章に述べた路地と同じような興味を感じしむるものが最も一つある。それは閑地あきちである。市中繁華なる街路の間に夕顔ひるがお、顔露草おおばこ、車前草などいう雑草の花を見る閑地である。

閑地は元よりその時と場所とを限らず偶然に出来るもの故われわれは市内の如何なる処に如何なる閑地があるかは地面師ならぬ限り予めこれを知る事が出来ない。唯その場に通りかかる始めてこれを見るのみである。しかし閑地は強いて捜し歩かずとも市中到るところにある。今まで久しく草の生えていた閑地が地ならしされてやがて普請ふしあんが始まるかと思えば、いつの間にかその隣の家が取払われて、或場合には火事で焼けたりして爰ここに別の閑地ができる。そして一雨ひとあめ降ればすぐに雑草が芽を吹きやがて花を咲かせ、忽ちにして蝶々ちょうちょう、蜻蛉とんぼやきりぎりすの飛んだり躍ねたりする野原になつてしまふと、外そと、圃こみちはあつてもないと同然、通り抜ける人たちの下駄の歯に小径は縦横に踏開かれ、昼は子供の遊場そびば、夜は男女が密会の場所となる。夏の夜に處の若い者が素人しろうと相撲すもうを催すのも閑地が

あるためである。

市中繁華な町の倉と倉との間、または荷船の込合^{こみあ}う堀割近くにある閑地には、今も昔と
変りなく折々紺屋^{こうや}の干場^{ほしば}または元結^{もとゆい}の糸繰場^{いとくりば}なぞになつている処がある。それらの光
景は私の眼には直に北斎^{ただち}の画題を想起^{おもいおこ}させる。いつぞや芝白金^{しばしろかね}の瑞聖寺^{ざいしゆうじ}という
名高い黄檗宗^{おうばくしゅう}の禅寺を見に行つた時その門前の閑地に一人の男が頻々^{しきり}と元結の車を繰つ
ていた。この景色は荒れた寺の門とその辺の貧しい人家などに対照して、私は俳人其角^{きかく}が
茅場町^{かやばちょう}薬師堂^{やくしどう}のほとりなる草庵の裏手、蓼花穂^{たではなほ}に出でたる閑地に、文七^{ぶんしち}というも
のが元結こぐ車の響をば昼も蜩に聞きまじえてまた殊更の心地し、

文七にふまるな庭のかたつむり

元結のぬる間はかなし虫の声

大絃^{たいげん}はさらすもとひに落^{おつ}る雁^{かり}

なぞと吟じたる風流の故事を思^{おもい}浮^{うき}べたのであつた。この事は晋子^{しんし}が俳文集『類柑子^{るいこうじ}』^{うち}
の中北の窓と題された一章に書かれてある。『類柑子』は私の愛読する書物の中の一冊である。

私がまだ中学校へ通つてゐる頃までは東京中には広い閑地が諸処方々にあつた。神田三崎町の調練場跡は人殺や首縊の噂で夕暮からは誰一人通るものもない恐しい処であつた。小石川富坂の片側は砲兵工廠の火避地で、樹木の茂つた間の凹地には溝みぞが小川のように美しく流れていった。下谷の佐竹ヶ原、芝の薩摩原の如き旧諸侯の屋敷跡はすつかり町になつてしまつた後でも今だに原の名が残されている。

銀座通に鉄道馬車が通つて、数寄屋橋から幸橋を経て虎の門に至る間の外濠には、まだ昔の石垣がそのままに保存されていた時分、今日の日比谷公園は見通しきれぬほど広々した閑地で、冬枯の雜草に夕陽のさす景色は目のあたり武藏野を見るようであつた。その時分に比すれば大名小路の跡なる丸の内の二菱ヶ原も今は大方赤煉瓦の会社になつてしまつたが、それでもまだ处处に閑地を残している。私は鍛冶橋を渡つて丸の内へ這入る時、いつでも東京府庁の前側にひろがつてゐる閑地を眺めやるのである。何故といふにこの閑地には繁茂した雜草の間に池のような広い水潦が幾個所もあつて夕陽の色や青空の雲の影が美しく漂うからである。私は何となくこういう風に打捨てられた荒地をばかつて南支那辺へんにある植民地の市街の裏手、または米国西海岸の新開地の街なぞで幾度も見た事があるような気がする。

桜田見附の外にも久しく兵営の跡が閑地のままに残されている。參謀本部下の堀端を通りながら眺めると、閑地のやや小高くなつていてる処に、雑草や野薦に蔽われたまま崩れた石垣の残つていてるのが見える。その石の古びた色とまた石垣の積み方とはおのずと大名屋敷の立つていた昔を想起させるが、それと共に私はまた霞ヶ関の坂に面した一方に今だに一棟か二棟ほど荒れたまま立つている平家の煉瓦造を望むと、御老中御奉行などいう代りに新しく参議だの開拓使などいう官名が行われた明治初年の時代に對して、今となつてはかえつて淡く寂しい一種の興味を呼出されるのである。

明治十年頃 小林清親翁こばやしきよちかおうが新しい東京の風景を写生した水彩画をば、そのまま木板摺もくはんにした東京名所の図の中に外桜田遠景と題して、遠く樹木の間にこの兵営の正面を望んだ処が描かれている。當時都下の平民が新に 皇城こうじょうの門外に建てられたこの西洋造を仰ぎ見て、いかなる新奇の念とまた崇拜の情に打れたか。それらの感情は新しい画工のいわば稚氣ちきを帶びた新画風と古めかしい木板摺の技術と相俟つて遺憾なく紙面に躍如としている。一時代の感情を表現し得たる点において小林翁の風景版画は甚だ価値ある美術といわねばならぬ。既に去歳きよさい木下李太郎 氏は『芸術』第二号において小林翁の風景版画に關する新研究の一端いふたんを漏らされたが、氏は進んで翁の経歴をたずねその藝術について更

に詳細なる研究を試みられるとの事である。

小林翁の東京風景画は 古河黙阿弥の世話狂言「筆屋幸兵衛」「明石島蔵」などと並んで、明治初年の東京を窺い知るべき無上の資料である。維新の当時より下つて憲法発布に至らんとする明治二十年頃までの時代は、今日の吾人よりしてこれを回顧すれば東京の市街とその風景の変化、風俗人情流行の推移等あらゆる方面にわたつて甚だ興味あるものである。されば滑稽なるわが日和下駄の散歩は江戸の遺跡と合せてしばしばこの明治初年の東京を尋ねる事に勉めている。しかし小林翁の版物に描かれた新しい当時の東京も、僅か二、三十年とは経たぬ中、更に更に新しい第二の東京なるものの発達するに従つて、漸次跡方もなく消滅して行きつつある。明治六年筋違見附を取壊してその石材を以て造つた彼の眼鏡橋はそれと同じような形の浅草橋と共に、今日は皆鉄橋に架け替えられてしまつた。大川端なる元柳橋は水際に立つ柳と諸共全く跡方なく取り払われ、百本杭はつまらない石垣に改められた。今日東京市中において小林翁の東京名所絵と参照して僅にその当時の光景を保つものを求めたならば、虎の門に残つてゐる旧工学寮の煉瓦造、九段坂上の燈明台、日本銀行前なる常盤橋その他数箇所に過ぎまい。官衙の建築物の如きも明治当初のままなるものは、桜田外の參謀本部、神田橋内の印刷局、

江戸橋際の駅逓局なぞ指折り数えるほどであろう。

閑地のことからまたしても話が妙な方面へそれてしまつた。

しかし閑地と古い都会の追想とはさして無関係のものではない。芝赤羽根の海軍造兵廠の跡は現在何万坪という広い閑地になつてゐる。これは誰も知つてゐる通り有馬侯の屋舗跡で、現在蠣殻町にある水天宮は元この邸内にあつたのである。一立斎広重の『東都名勝』の中赤羽根の図を見ると柳の生茂つた淋しい赤羽根川の堤に沿うて大名屋敷の長屋が遠く立続いてゐる。その屋根の上から水天宮へ寄進の幟が幾筋となく閑いてゐる様が描かれている。この図中に見る海鼠壁の長屋と朱塗の御守殿門とは去年の春頃までは半ば崩れかかつたままながらなお当時の面影を留めていたが、本年になつて内部に立つ造兵廠の煉瓦造が取扱われると共に、今は跡方もなくなつてしまつた。

その時分——今年の五月頃の事である。友人久米君から突然有馬の屋敷跡には名高い猫驕動の古塚が今だに残つてゐるという事だから尋ねて見たらばと注意されて、私は慶義塾の帰りがけ始めて久米君とこの閑地へ日和下駄を踏入れた。猫塚の噂は造兵廠が取扱いになつて閑地の中にはそろそろ通抜ける人たちの下駄の歯が縦横に小径をつけ始

める頃から誰いうとなくいい伝えられ、既にその事は二、三の新聞紙にも記載されていた
という事であつた。

私たち二人は三一田通りに沿う外^{そとがこい}の溝の縁に立止^{どぶふちたちどま}つて何処か這入りいい処を見付けようと思つたが、板塀には少しも破目^{やぶれめ}がなく溝はまた広くてなかなか飛越せそうにも思われない。見す見す閑地の外を迂廻^{うかい}して赤羽根の川端まで出て見るのも業腹^{ぎょうはら}だし、そうちといつて通過ぎた酒屋の角まで立戻つて坂を登り閑地の裏手へ廻つて見るのも退儀^{たいぎ}である。そう思うほどこの閑地は広々としているのである。私たちはやむをえず閑地の一角に恩賜財団^{おんしさいせいかい}済生会とやらいう札を下げた門口を見付けて、用事あり氣に其処から構内^{そこ}_{かまえう}へ這入つて見た。構内は往来から見たと同じように寂^{しあわせ}として、更に番人のいる様子も見えない。私たちは安心してすんすんと赤煉瓦の本家^{おもや}について迂廻しながらその裏手へ出てみると、僅か上下^{うえしたふたすじ}二筋の鉄条綱^{てつじょうこう}が引張つてあるばかりで、広々した閑地は正面に鬱々として老樹の生茂つた辺から一帯に丘陵をなし、その麓には大きな池があつて、男や子供が大勢釣竿を持つてわいわい騒いでいる意外な景気に興味百倍して、久米君は手早く夏羽織^{なつばおり}の裾と袂^{すそたもと}をからげるや否や身軽く鉄条綱の間をくぐつて向へ出てしまつた。私は生憎^{あいにく}その日は学校の図書館から借出した重い書物の包を抱えていた上に、片手には例

の蝙蝠傘を持っていた。そればかりでない。私の穿いていた藍縞仙台平の夏袴は死んだ父親の形見でいかほど胸高に締めてもとかくずるすると尻下りに引摺つて来る。久米君は見兼ねて鉄条綱の向から重い書物の包と蝙蝠傘とを受取つてくれたので、私は日和下駄の鼻緒を踏み《ふみし》め、紬の一重羽織の裾を高く巻上げ、きっと夏袴の股も立ちを取ると、図抜けて丈の高い身の有難さ、何の苦もなく鉄条綱をば上から一跨ぎに跨いでしまつた。

二人は早速閑地の草原を横切つて、大勢釣する人の集つている古池の渚へと急いだ。

池はその後に聳ゆる崖の高さと、また水面に枝を垂した老樹や岩石の配置から考えて、その昔ここに久留米二十余万石の城主の館が築かれていた時分には、現在水の漂つている面積よりも確にその二、三倍広かつたらしく、また崖の中腹からは見事な滝が落ちていたらしく思われる。私は今まで書物や絵で見ていた江戸時代の数ある名園の有様をば臙氣ながら心の中に描出した。それと共に、われわれの生れ出た明治時代の文明なるものは、実にこれらの美術をば惜氣もなく破壊して兵営や兵器の製造場にしてしまつたような英断壮挙の結果によつて成つたものである事を、今更の如くつくづくと思知るのであつた。池のまわりは浅草公園の釣堀も及ばぬ賑さである。鰯と鮎と時には大きな鰻が釣れると

いう事だ。私たちは水際みずぎわを廻つて崖の方へ通ずる小径こみちを攀よじ登のぼつて行くと、大木の根方ねがたに爺じいちゃんが一人腰をかけて釣道具に駄菓子やパンなどを売つている。機を見るに敏なるこの親おおきな爺の商法にさすがのわれわれも聊か敬服して、その前に立止つたついで、猫塚の所在あらかを尋ねると、爺さんは既に案内者然たる調子で、崖の彼方かなたなる森蔭の小径くわを教え、なお猫塚といつても今は僅にかけた石の台を残すばかりだという事まで委しく話してくれた。

名所古蹟は何處に限らず行つて見れば大抵こんなものかと思うようななつまらぬものである。ただ唯その処まで尋ね到る間の道筋や周囲の光景及びそれに附隨する感情等によつて他日話の種となすに足るべき興味つなが繋がれるのである。有馬の猫塚は釣道具を売つている爺さんが話したよりも、来て見れば更につまらない石のかけらに過ぎなかつた。果してそれが猫塚の台石だいしであつたか否かも甚だ不明な位であつた。私たちは旧造兵廠の建物の一部を埋められた崖の中腹に一ツ二ツ落ち転げている石を見つけたばかりである。しかしここに来るまでの崖の小径と周囲の光景とは遺憾なく私ら二人を喜ばしめた。私は實際今日の東京市中にかくも幽邃ゆうすいなる森林が残されていようとは夢にも思い及ばなかつた。柳椎檉杉椿などの大木に交つて扇骨木八ツ手などの庭木さえ多年手入をせぬ処から今は全く野生の

林同様七重八重にその枝と幹とを入れちがえている。時節は丁度初夏の五月の事とて、これらの樹木はいずれもその枝の撓むほど、重々しく青葉に蔽われている上に、氣味の悪い名の知れぬ寄生木が大樹の瘤や幹の股から髪の毛のような長い葉を垂らしていた。遠い電車の響やまた近く崖下で釣する人の立騒ぐ声にも恐れず勢よく囀る小鳥の声が鋭く梢から梢に反響する。私たち二人は雑草の露に袴の裾を潤しながら、この森蔭の小暗い片隅から青葉の枝と幹との間を透して、彼方遙かに広々した閑地の周囲の処々に残つてゐる練垣の崩れに、夏の日光の殊更明く照渡つてゐるのを打眺め、何という訳もなく唯惆悵として去るに忍びざるが如くいつまでもいた。私たちは既に破壊されてしまった有馬の旧苑に対しても痛嘆するのではない。一度破壊されたその跡がここに年を経て折角荒蕪の詩趣に蔽われた閑地になつてゐる処をば、更に何らかの新しい計画が近い中にこの森との雑草とを取扱つてしまふであろう。私たちはその事を予想して前以て深く嘆息したのである。

私は雑草が好きだ。董蒲公英のよくな春草、桔梗女郎花のよくな秋草にも劣らず私は雑草を好む。閑地に繁る雑草、屋根に生ずる雑草、道路のほとり溝の縁に生ずる雑草

を愛する。閑地は即ち雑草の花園である。「蚊帳釣草」の穂の練絹の如くに細く美しき、「猫じやらし」の穂の毛よりも柔き、さては「赤の飯」の花の暖そうに薄赤き、「車前草」の花の爽に蒼白き、「繫」の花の砂よりも小くして眞白なる、一つ一つに見来れば雑草にもななかに捨てがたき可憐なる風情があるではないか。しかしそれらの雑草は和歌にも咏われず、宗達光琳の絵にも描かれなかつた。独り江戸平民の文学なる俳諧と狂歌あつて始めて雑草が文学の上に取扱われるようになつた。私は喜多川歌麿の描いた『絵本虫撰』を愛して止まざる理由は、この浮世絵師が南宗の画家も四条派の画家も決して描いた事のない極めて卑俗な草花と昆虫とを写生しているがためである。この一例を以てしても、俳諧と狂歌と浮世絵とは古来わが貴族趣味の芸術が全く閑却していた一方を拾取つて、自由にこれを芸術化せしめた大なる功績を担うものである。

私は近頃数寄屋橋外に、虎の門金毘羅の社前に、神田聖堂の裏手に、その他諸処に新設される、公園の樹木を見るよりも、通りがかりの閑地に咲く雑草の花に対して遙にいい知れぬ興味と情趣を覚えるのである。

戸川秋骨君が『そのままの記』に霜の戸山ヶ原という一章がある。戸山ヶ原は旧尾び

州侯御下屋舗しゅうこうおしもやしきのあつた処、その名高い庭園は荒されて陸軍戸山学校と変じ、附近は広漠たる射的場しゃてきばとなつてゐる。この辺豊多摩郡あたりよたまごおりに属し近き頃まで杜鵑花つづじの名所であつたが、年々人家稠密ちゅうみつしていわゆる郊外の新開町しんかいまちとなつたにかかわらず、射的場のみは今なお依然として原のままである。秋骨君曰く

戸山の原は東京の近郊に珍らしい広開した地である。目白の奥から巣鴨滝すがもたきがわの川へかけての平野は、さらに広い武藏野の趣を残したものであろう。しかしその平野は凡て耒耜らいしが加えられている。立派に耕作された畠地はたぢである。従つて田園の趣はあるが野趣に至つては乏しい。しかるに戸山の原は、原とは言えども多少の高低があり、立樹たぢきが沢山にある。大きくはないが喬木きょうぼくが立ち籠めて叢林そうりんを為した処もある。そしてその地には少しも人工が加わつていない。全く自然のままである。もし当初の武藏野の趣を知りたいと願うものは此処にそれを求むべきであろう。高低のある広い地は一面に雑草を以て蔽おおわれていて、春は摘草つみくさに児女の自由に遊ぶに適し、秋は雅人がほんの擅いままに散歩するに任す。四季の何時いつと言わず、絵画の学生が此処其処にカンヴァスたずさを携えて、この自然を写しているのが絶えぬ。まことに自然の一大公園である。最も健全なる遊覧地である。その自然と野趣とは全く郊外の他の場所に求むべからざるものであ

る。凡そ今日の勢、いやしくも余地あれば其処に建築を起す、然らずともこれに乘組を加うるに 躊躇しない。然るに如何にして大久保の辺に、かかる殆んど自然そのままの原野が残つてゐるのであるか。不思議な事にはこれが實に俗中の俗なる陸軍の賜である。戸山の原は陸軍の用地である。その一部分は戸山学校の射的場で、一部は練兵場として用いられている。しかしその大部分は殆んど不用の地であるかの如く、市民もしくは村民の 躊躇するに任してある。騎馬の兵士が大久保柏木の小路を隊をなして駆せ廻るのは、甚だ五月蠅いものである。否五月蠅いではない癪にさわる。天下の公道をわがもの顔に横領して、意氣頗る昂る如き風あるは、われら平民の甚だ不快とする処である。しかしこの不快を与うるその大機関は、また古の武藏野をこの戸山の原に、余らのために保存してくれるものである。思えば世の中は不思議に相贖うものである。一利一害、今さらながら応報の説が殊に深く感ぜられる。

秋骨君が言う處大にわが意を得たものである。ここは直に移して代々木青山の練兵場または高田の馬場等に應用する事が出来る。晚秋の夕陽を浴びつつ高田の馬場なる黄葉の林に彷徨い、あるいは晴れたる冬の朝青山の原頭に雪の富士を望むが如きは、これ皆俗中の俗たる陸軍の賜物ではないか。

私は慶應義塾に通う電車の道すがら、信濃町権田原しなのまちごんだわらへ、青山の大通を横切つて三
聯隊裏れんたいあくらと記した赤い棒の立つてゐる辺りまで、その沿道の大きな建物は尽く陸軍に属
するもの、また電車の乗客街上の通行人は兵卒ならざれば士官ばかりという有様に、私は
いつも世あげを挙て悉く陸軍たるが如き感を深くする。それと共に権田原の林に初夏の新緑を
望み、三聯隊裏と青山墓地との間の土手や草原に春は若草、秋は芒すすきの穂を眺めて、秋骨君
のいわゆる応報の説に同感するのである。

四谷鮫ヶ橋よつやはさめはしと赤坂離宮あかさかりきゅうとの間に甲武鉄道の線路こうぶつてつどうを堺さかいにして荒草妻こうそうせいせい々たる火避ひよ
地けちがある。初夏の夕暮私は四谷通の髪結床かみゆいどこへ行つた帰途かえりみちまたは買物にでも出た時、
法藏寺横町ほうぞうじよこちようだとかあるいは西念寺横町さいねんじよこちようだとか呼ばれた寺の多い横町へ曲つて、車
の通れぬ急な坂をば鮫ヶ橋たにまち谷町おへ下り貧家の間を貫く一本道をば足の行くがままに自然おのづ
とかの火避地に出で、ここに若葉と雑草と夕榮ゆうぱえとを眺めるのである。

この散歩は道程の短い割に頗る変化に富むが上に、また偏狭なる我が画興に適する処
が渺くない。第一は鮫ヶ橋なる貧民窟の地勢である。四谷と赤坂両区の高地に挟まれたこ
の谷底の貧民窟は、堀割と肥料船と製造場とを背景にする水場の貧家に対照して、坂と
崖と樹木とを背景にする山の手の貧家の景色を代表するものであろう。四谷の方の坂から

見ると、貧家のブリキ屋根は木立の間に寺院と墓地の裏手を見せた向側の崖下にごたごたと重り合つてその間から折々汚らしい洗濯物をば風に閃している。初夏の空美しく晴れ崖の雑草に青々とした芽が萌え出で四辺の木立に若葉の緑が滴る頃には、眼の下に見下すこの貧民窟のブリキ屋根は一層汚らしくこうした人間の生活には草や木が天然から受ける恵みにさえ与れないのかとそぞろ悲惨の色を増すのである。また冬の雨降り濺ぐ夕暮なぞには破れた障子にうつる燈火の影、鴉鳴く墓場の枯木と共に遺憾なく色あせた冬の景色を造り出す。

この暗鬱な一隅から僅に鉄道線路の土手一筋を越えると、その向にはひろびろした火避地を前に控えて、赤坂御所の土塀が乾の御門というのを中心にして長い坂道をば遠く青山の方へ攀登つてゐる。日頃人の通の少ない処とて古風な練塀とそれを蔽う樹木とは殊に気高く望まれる。私は火避地のやや御所の方に近く猫柳が四、五本乱れ生じてゐるあたりに、或年の夏の夕暮雨のような水音を聞付け、毒虫をも恐れず草を踏み分けながらその方へ歩寄つた時、柳の蔭には山の手の高台には思いも掛けない蘆の茂りが夕風にそよいでいて、井戸のように深くなつた凹味の底へと、大方御所から落ちて来るらしい水流が大きな堰にせかれて滝をなしているのを見た。夜になつたらきつと螢が飛ぶにちがい

ない。私はこの夕ばかり夏の黄昏の長くつづく上にも夕月の光ある事を憾みながら、もと来た鮫ヶ橋の方へと踵を返した。

鮫ヶ橋の貧民窟は一時代々木の原に万国博覧会が開かれるとかいう話のあつた頃、もしそうなつた暁四谷代々木間の電車の窓から西洋人がこの汚い貧民窟を見下しでもすると國家の耻辱になるから東京市はこれを取扱つてしまふとやらいう噂があつた。しかし万国博覧会も例の日本人の空景氣で金がない処からおじやんになり、従つて鮫ヶ橋も今日なお取扱われず、西念寺の急な坂下に依然として剥ちよろのブリキ屋根を並べている。貧民窟は元より都會の美觀を増すものではない。しかし万国博覧会を見物に来る西洋人に見られたからとて何もそれほどに気まりを悪るがるには及ぶまい。当路の役人ほど馬鹿な事を考える人間はない。東京なる都市の体裁、日本なる国家の体面に関するものを挙げたら貧民窟の取扱いよりも先ず市中諸処に立つ銅像の取除を急ぐが至当であろう。

現在私の知つてゐる東京の閑地^{あきち}は大抵以上のようなものである。わが住む家の門外にもこの両三年市ヶ谷監獄署後の閑地がひろがつていたが、今年の春頃から死刑台の跡に観音ができあたりは日々町になつて行く、遠からず芸者^{げいしゃ}家^{あと}が許可されるとかいう噂さえあ

る。

芝浦の埋立地も目下家屋の建たない間は同じく閑地として見るべきものであろう。現在東京市内の閑地の中でこれほど広々とした眺望をなす処は他にあるまい。夏の夕、海の上に月の昇る頃はひろびろした閑地の雑草は一望煙の如くかすみ渡つて、彼方此方に通ずる堀割から荷船の帆柱が見える景色などまんざら捨てたものではない。

東京市の土木工事は手をかえ品をかえ、孜々として東京市の風景を毀損する事に勉めているが、幸にも雑草なるものあつて焼野の如く木一本もない閑地にも緑柔き毛氈を延べ、月の光あつてその上に露の珠の刺繡をする。われら薄俸の詩人は田園においてよりも黄塵の都市において更に深く「自然」の恵みに感謝せねばならぬ。

第九 崖

数ある江戸名所案内記中その最も古い方に属する『紫の一一本』や『江戸惣鹿子大全』などを見ると、坂、山、窪、堀、池、橋などいう分類の下に江戸の地理古蹟名所の説明をしている。しかしその分類は例えば谷という處に日比谷、谷中、渋谷、雑司ヶ谷などを編入したように、地理よりも実は地名の文字から来る遊戯的興味に基いた処が尠くない。かくの如きはけだし江戸軽文学のいかなるものにも必ず発見せられるその特徴である。

私は既に期せずして東京の水と路地と、つづいて閑地に対する興味をばやや分類的に記述したので、ここにもう一つ崖なる文章を付加えて見よう。

崖は閑地や路地と同じようにわが日和下駄の散歩に尠からぬ興味を添えしめるものである。何故といふに崖には野籠や芒に交つて蘿、藪枯しを始めありとあらゆる雑草の繁茂した間から場所によると清水が湧いたり、下水が谷川のように潺々と音して流れたりしている処がある。また落掛るように斜に生えた樹木の幹と枝と殊に根の形などに絵画的興趣を覚えさせることが多いからである。もし樹木も雑草も何も生えていないとすれば、

東京市中の崖は切立つた赤土の夕日を浴びる時なぞ宛然堡壘を望むが如き悲壯の觀を示す。

昔から市内の崖には別にこれという名前のついた処は一つもなかつたようである。『紫の一本』その他の書にも、窪、谷なぞいう分類はあるが崖という一章は設けられていない。しかし高低の甚しい東京の地勢から考えて、崖は昔も今も変りなく市中の諸処に聳えていたに相違ない。

上野から道灌山どうかんやま飛鳥山あすかやまへかけての高地の側面は崖うちの中で最も偉大なものであろう。神田川を限るお茶の水の絶壁は元より小赤壁しょうせきへきの名がある位で、崖の最も絵画的なる実例とすべきものである。

小石川春日町こいしかわかすがまちから柳町やなぎちょう指ヶ谷町さしがやまちへかけての低地から、本郷の高台ほんごうたかだいを見る処ところには、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生茂おいしげった崖が現れていた。根津の低地から弥生ヶ岡やよいおかと千駄木の高地を仰げばここもまた絶壁である。絶壁の頂に添うて、根津権現ごんげんの方から団子坂の上へと通ずる一条の路がある。私は東京中の往来の中で、この道ほど興味ある処はないと思っている。片側かたかわは樹と竹藪に蔽われて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ崩れ落ちはせ

ぬかと危まれるばかり、足下あしもとを覗くと崖の中腹に生えた樹木の梢こずえを透して谷底のようない處にある人家の屋根が小さく見える。されば向むこうは一面に遮るものなき大空かぎりもなく広々として、自由に浮雲の定めなき行衛ゆくえをも見極められる。左手には上野谷中に連る森黒く、右手には神田下谷浅草へかけての市街が一目に見晴され其処より起る雜然たる巷ちまたの物音が距離のために柔げられて、かのヴエルレエヌが詩に、

かの平和なる物のひびきは
街まちより来る……

といつたような心持を起させる。

当代の碩学せきがく森鷗外先生の居邸きよていはこの道のほとり、団子坂だんござかの頂いただきに出ようとする処にある。二階の欄干らんかんに彳むと市中の屋根を越して遙に海が見えるとやら、然るが故に先生はこの楼を觀潮樓かんちょうろうと名付けられたのだと私は聞伝えている。団子坂をば汐見坂しおみという由後に人より聞きたり。度々私はこの觀潮樓に親しく先生に見ゆるの光榮に接しているが多くは夜になつてからの事なので、惜しいかな一度もまだ潮を觀る機会がないのである。その代り、私は忘れられぬほど音色の深い上野の鐘を聴いた事があつた。日中はまだ残暑の去りやらぬ初秋しょしゅうの夕暮であつた。先生は大方御食事中でもあつたのか、私は取

次の人には案内されたまま暫くの間唯一人この観潮樓の上に取残された。樓はたしか八畳に六畳の二間かと記憶している。一間の床には何かいわれのあるらしい雷という一字を石い摺にした大幅がかけてあつて、その下には古い支那の陶器と想像せられる大きな六角の花瓶が、花一輪としてないために、かえつてこの上もなく厳格にまた冷静に見えた。座敷中にはこの床の間の軸と花瓶の外は全く何一つ置いてないのである。額もなければ置物もない。おそるおそる四枚立の襖の明放してある次の間を窺うと、中央に机が一脚置いてあつたが、それさえいわば台のようなもので、一枚の板と四本の脚があるばかり、抽出もなければ彫刻のかぎりも何もない机で、その上には硯もインキ壺も紙も筆も置いてはない。しかしその後に立てた六枚屏風の裾からは、紐で束ねた西洋の新聞か雑誌のようなもののかたはし端が見えたので、私はそつと首を延して差覗くと、いずれも大部のものと思われる種々なる洋書が座敷の壁際間に高く積重ねてあるらしい様子であった。世間には往々読まさる書物をれいれいと殊更人の見る処に飾立てて置く人さえあるのに、これはまた何という一風変った瘤癬であろう。私は『柵草紙』以来の先生の文学とその性行について、何とはなく沈重に考え始めようとした。あたかもその時である。一際高く漂い来る木犀の匂と共に、上野の鐘声は残暑を払う涼しい夕風に吹き送

られ、明放した観潮楼上に唯一人、主人を待つ間の私を驚かしたのである。

私は振返つて音のする方を眺めた。千駄木の崖上から見る彼の広漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ一面に煙り渡つた底から、数知れぬ燈火を輝し、雲の如き上野谷中の森の上には淡い黃昏の微光をば夢のように残していた。私はシャワーンの描いた聖女ジエネヴィエーブが静に巴里の夜景を見下している、かのパンテオンの壁画の神秘なる灰色の色彩を思出さねばならなかつた。

鐘の音は長い余韻の後を追掛け追掛け撞き出されるのである。その度ごとにその響の湧わきいづる森の影は暗くなり低い市中の燈火は次第に光を増して来ると車馬の声は嵐のようにかえつて高く、やがて鐘の音の最後の余韻を消してしまつた。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない観潮楼の内部を見廻した。そして、この何物もない楼上から、この市中の燈火を見下し、この鐘声とこの車馬の響をかわるがわるに聴澄ましながら、わが鷗外先生は静に書を読みまた筆を執られるのかと思うと、實にこの時ほど私は先生の風貌をば、シャワーンが壁画中の人人物同様神秘に感じた事はなかつた。

ところが、「ヤア大変お待たせした。失敬失敬。」といつて、先生は書生のように二階の梯子段を上つて来られたのである。金巾の白い襯衣一枚、その下には赤い筋のはい

つた軍服のズボンを穿いておられたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の一階か何かでごろごろしている兵隊さんのように見えた。

「暑い時はこれに限る。一番涼しい。」といいながら先生は女中の持運ぶ銀の皿を私の方に押出して葉巻をすすめられた。先生は陸軍省の医務局長室で私に対談せられる時にもきまつて葉巻を勧められる。もし先生の生涯に些^{すす}かたりとも贅沢らしい事があるとするならば、それはこの葉巻だけであろう。

この夕^{ゆうべ}私は親しくオイケンの哲学に関する先生の感想を伺つて、夜も九時過再び千駄木の崖道をば根津権現の方へ下り、不忍池^{しおばずのいけ}の後を廻ると、ここにも聳え立つ東照宮^{とうしょうぐう}の裏手一面の崖に、木の間^{こま}の星を数えながらやがて広小路^{ひろこうじ}の電車に乗つた。

私の生れた小石川^{こいしかわ}には崖が沢山あつた。第一に思出すのは茗荷谷^{みょうがだに}の小径^{こみち}から仰ぎ見る左右の崖で、一方にはその名さえ氣味の悪い切支丹坂^{きりしたんざか}が斜に開けそれと向い合つては名前を忘れてしまつたが山道のような細い坂が小日向台町^{こひなただいまち}の裏へと攀^{よじのぼ}登つてゐる。今はこの左右の崖も大方は趣のない積み方をした当世風の石垣となり、竹藪も樹木も伐払^{きりはら}われて、全く以前の薄暗い物凄さを失つてしまつた。

まだ私が七、八ツの頃かと記憶している。切支丹坂に添う崖の中腹に、大雨か何かのために突然真四角な大きな横穴が現われ、何処まで深くつづいているのか行先が分らぬといふので、近所のものは大方切支丹屋敷のあつた頃掘抜いた地中の抜道ではないかなぞと評判した。

この茗荷谷を小日向水道町の方へ出ると、今も往来の真中に銀杏の大木が立つていて、草鞋と炮烙が沢山奉納してある小さなお宮がある。一体この水道端の通は片側に寺が幾軒となくつづいて、種々の形をした棟門を並べている処から、今も折々私の喜んで散歩する処である。この通を行尽すと音羽へ曲ろうとする角に大塚火薬庫のある高い崖が聳え、その頂にちらばらと喬木が立つていて。崖の草枯れ黄み、この喬木の冬枯した梢に鳥が群をなして棲る時などは、宛然文人画を見る趣がある。これと対して牛込の方を眺めると赤城の高地があり、正面の行手には目白の山の側面がまた崖をなしている。目白の眺望は既に蜀山人の東豊山十五景の狂歌にもある通り昔からの名所である。蜀山人の記に曰く

東豊山新長谷寺 目白不動尊のたゝせ玉へる山は宝永の頃再昌院法印のす
める関口の疏儀莊よりちかければ西南にかたぶく日影に杖をたてゝ時しらぬ富

士の白雪をながめ千町の田面のみどりになびく風に涼みてしばらくいきをのぶ
 とぞ聞えし又物部の翁の牛込にいませし頃にやありけん南郭春台蘭亭を
 はじめとしてこのほとりの十五景をわかつてからうたに物せし一巻をもみたりし事
 あればわが生れたる牛込の里ちかきあたりのけしきもなつかしくこゝにその題をうつ
 して夷歌によみつゞけぬるもそのかみ大黒屋ときこえし高どのには母の六十の賀の
 舐をひらきし事ありしも又天明のむかしなればせき口の紙の漉かへし目白の滝のい
 とのくりことになんありける

鶴山桜花

昔みし田鼠うづらの山ざくら化しての後は花もちらほら

城門緑樹

しゃちほうおの魚木にのぼる青葉山わたりやぐらの牛込の門

渓辺流蛍

何がしの大あたまにも似たるかなかまくら道に出戸の蛍は

種田落月

しら露のむすべる霜のをくてよりわせ田にはやく落る月影

平田香稻

平かな水田もことし代よがよくてふねのほにほがさくかとぞみる

寺前紅楓

てらまへて酒さけのませんともみぢ見みの地じ口ぐちまじりの顔ゆうの夕ゆふばへ

月中望嶽

八葉はちようの芙蓉ふようの花を一りんのかつらの枝えだにさかせてぞみる

江村飛雪

酒さけかひにゆきの中なか里ざとひとすぢにおもひ入江いりえの江戸川えどがわの末すえ

長谷梵宇

明みょう王おうのふるきをもつてあたらしきにゐはせ寺でらの法師ぼうしたるべし

赤城霞色

朝あさ夕ゆうのかすみのいろも赤城あかぎやまそなたのかたにむかでしらるゝ

高田叢祠

みあかしの高田たかたのかたにひかりまち穴あな八幡はちまんか水みずいなりかも

濟松鐘磬

濟松寺祖心の尼の若かりしむかしつけたるかねの声々
さいしょうじそしんあまこゑごえ

田間一路

横にゆく蟹川 こえて 真直に通る門田の中ぜきの道
かにがわまつすぐかどたなか

巖畔酒壠

杉のはのたてる門辺に目白おし 羽觴を飛す岸の上の茶や
かどべうしょうとばへちや

堰口水碓

水車くるくめぐりあふことは人目つゝみのせき口もなし
みずぐるまぐち

去年の暮巖谷四六君小波先生令弟と図らず木曜会忘年会の席上に邂逅した時談話はた
またまわが『日和下駄』の事に及んだ。四六君は 韶町平川町から永田町の裏通
へと上の處に以前は実に幽邃な崖があつたと話された。小波先生も四六君も共々そ
の頃は永田町なる故一六先生の邸宅にまだ部屋住の身であつたのだ。丁度その時分私も
一時父の住まつた官舎がこの近くにあつたので、憲法發布当時の淋しい麹町の昔をいろいろと追想する事ができる。一年ほど父の住つておられた某省の官舎もその庭先がやはり急
な崖になつていて、物凄いばかりの竹藪であつた。この竹藪には 蟬蜍のいた事これ
また氣味悪いほどで、夏の夕まだ夜にならない中から、何十四となく這い出して来る蟬蜍
ゆうべひきがえるは

に庭先は一面大きな転太石でも敷詰めたような有様になる。この庭先の崖と相対しては、一筋の細い裏通を隔てて独逸公使館の立つている高台の背後^{うしろ}がやはり樹木の茂つた崖になつていた。私は寒い冬の夜なぞ、日本伝來の迷信に養われた子供心に、われにもあらず幽靈や何かの事を考え出して一生懸命に瘦我慢しつつ真暗な廊下を独り廁へ行く時、その破れた窓の障子から向の崖なる木立の奥深く、巍然たる西洋館の窓々に燈火の煌々と輝くのを見、同時にピアノの音の漏れるるを聞きつけて、私は西洋人の生活をば限りもなく不思議に思つたことがあつた。

近頃日和下駄を曳摺つて散歩する中、私の目についた崖は芝^{しば}一本榎なる高野山の裏手または伊皿子台から海を見るあたり一帯の崖である。二本榎高野山の向側なる上行寺は、其角の墓ある故に人の知る処である。私は本堂の立つている崖の上から摺鉢の底のようなこの上行寺の墓地全体を覗き見る有様をば、其角の墓諸共に忘れがたく思つてゐる。白金の古刹瑞聖寺の裏手も私には幾度か杖を曳くに足るべき頗る幽邃なる崖をなしている。

麻布赤坂にも芝同様崖が沢山ある。山の手に生れて山の手に育つた私は、常にかの軽

快瀧洒なる船と橋と河岸の眺を専有する下町を羨むの余り、この崖と坂との佶屈なる風景を以て、大に山の手の誇とするのである。『隅田川両岸一覽』に川筋の風景をのみ描き出した北斎も、更に足曳の山の手のために、『山復山』三巻を描いたではないか。

第十 坂

前回記する処の崖といささか重複する嫌いがあるが、市中の坂について少しく述べたい。坂は即ち平地に生じた波瀾である。平坦なる大通りは歩いて滑らず躓かず、車を走らせて安全無事、荷物を運ばせて賃銀安しといえども、無聊に苦しむ閑人の散歩には余りに単調に過ぎる。けだし東京市中における眺望の一直線をなす美觀は、橋あり舟ある運河の岸においてのみこれを看得るが、銀座日本橋の大通の如き平坦なる街路の眺望に至つては、われら不幸にしていまだ泰西の都市において経験したような感興を催さない。西洋の都市においても私は紐育の平坦なる Fifth Avenue よりコロンビヤの高台に上る石級を好み、巴里の大通よりも遙にモンマルトルの高台を愛した。里昂にあつてはクロワルツスの坂道から、手摺れた古い石の欄干を越えて眼下にソオンの河岸通を見下しながら歩いた夏の黄昏をば今だに忘れ得ない。あの景色を思浮べる度々、私は仏蘭西の都會は何處へ行つてもどうしてあのようく美しいのであろう。どうしてあのようく軟く人の空想を刺※するよう出來ているのであろうと、相も變らず遺瀬なき追憶の夢にのみ打

沈められるのである。

その頃私は年なお三十に至らず、孤身飄然、異郷にあつて更に孤客となるの怨なく、到る処の青山これ墳墓地ともいいたいほど意氣頗るところがあつたが今その十年の昔と、鬢髮いまだ幸にして霜を戴かざれど精魂漸く衰え聖代の世に男一匹の身を持つてあぐみ為す事もなき苦しさに、江戸絵図を懷中に日和下駄曳摺つて、既に狂歌俳句に読古された江戸名所の跡を弔い歩む感慨とを比較すれば、全くわれながら一滴の涙なきを得ない。さりながら、かの端唄の文句にも、色氣ないと苦にせまい賤が伏家に月もさす。徒に悲み憤つて身を破るが如きはけだし賢人のなさざる処。われらが住む東京の都市いかに醜く汚しといふとも、ここに住みここに朝夕を送るかぎり、醜き中にも幾分の美を搜り汚き中にもまた何かの趣を見出し、以て気は心とやら、無理やりにも少しは居心地のよいように自ら思いなす処がなければならぬ。これ元來が主意というものなき我が日和下駄の散歩の聊か以て主意とする処ではないか。

そもそも東京市はその面積と人口においては既に世界屈指の大都である。この盛況は銀座日本橋の如き繁華の街路を歩むよりも、山の手の坂に立つて遙に市中を眺望する時、誰が目にも容易く感じ得らるる処である。この都に生れ育ちて四時の風物何一つ珍しい事も

ないまでに馴れ過ぎてしまつたわれらさえ、折あつて九段坂くだんざか、三田聖坂みたひじりざか、あるいは霞ヶ関せきかを昇降する時には覚えずその眺望の大なるに歩みを留めるではないか。東京市は坂の上の眺望によつて最もよくその偉大を示すというべきである。古来その眺望よりして最も名高きは赤坂靈南坂あかさかれいなんざかうえ上より芝西しばにしの久保くぼへ下りる江戸見坂えどみざかである。愛宕山あたごやまを前にして日本橋京橋から丸の内を一目に望む事が出来る。芝伊皿子台いさらごだい上の汐見坂しおみざかも、天然の地形と距離との宜しきがために品川の御台場依然として昔の名所絵に見る通り道行く人の鼻先に浮べる有様、これに因つてこれを観れば古来江戸名所に数えらるる地点悉く名ばかりの名所でない事を証するに足りる。

今市中の坂にして眺望の佳なるものを挙げんか。神田お茶の水の昌平坂しょうへいざかは駿河台するがだい岩崎邸門前いわさきていもんぜんの坂と同じく万世橋まんせいばしを眼の下に神田川かんだがわを眺むるによろしく、良角坂さいかくざか水道橋内駿河台西方は牛込麹町の高台並びに富嶽ふがくを望ましめ、飯田町いいだまちの二合半坂にこうはんざかは外濠とぼりを越え江戸川の流を隔てて小石川牛天神うしてんじんの森を眺めさせる。丁度この見晴しと相対するものは則ち小石川伝通院前でんづういんの安藤坂あんどうざかで、それと並行する金剛寺坂こんごうじざか荒木坂服部坂あらきざかはつと大日坂だいにちざかなどは皆齊しく小石川より牛込赤城番町辺あかぎばんちようへんを見渡すによい。しかしてこれらの坂の眺望にして最も絵画的なるは紺色なす秋の夕靄ゆうもやの中より人家の灯のちらつ

く頃、または高台の樹木の一斉に新緑に粧わる初夏晴天の日である。もしそれ明月皎々たる夜、牛込神樂坂、淨瑠璃坂、左内坂、また逢坂などのはとりに佇んで御濠の土手のつづく限り老松の婆娑たる影静なる水に映ずるさまを眺めなば、誰しも東京中にかくの如き絶景あるかと驚かざるを得まい。

坂はかくの如く眺望によりて一段の趣を添うといえども、さりとて全く眺望なきものも強ち捨て去るには及ばない。心あつてこれを搜らんと欲すれば画趣詩情は到る処に見出しが得られる。例えば四谷愛住町の暗闇坂、麻布一之橋向の日向坂の如きを見よ。

といった処でこれらの坂はその近所に住む人の外はちよつとその名さえ知らぬほどな極めて平々凡々たるものである。しかし暗闇坂は車の上らぬほど急な曲つた坂でその片側は全長寺の墓地の樹木鬱蒼として日の光を遮り、乱塔婆に雜草生茂る有様何となく物凄い坂である。二の橋の日向坂はその麓を流れる新堀川の濁水とそれに架つた小橋と、斜に坂を蔽う一株の榎との配合が自ら絵になるよう甚だ面白く出来ている。振袖火事で有名な本郷本妙寺向側の坂もまたその麓を流れる下水と小橋とのために私の記憶する処である。赤坂喰違より麹町清水谷へ下る急な坂、また上二番町辺樹木谷へ下る坂の如きは下弦の月鎌の如く樹頭に懸る冬の夜、広大なるこの辺の屋敷屋敷の犬の

遠吠え聞ゆる折なぞ市中とは思えぬほどのさびしさである。坂はまた土地の傾斜に添うて立つ家屋垣樹木等の見通しによつて大に眼界を美ならしむる。則ち旧加州侯の練垣立ちつづく本郷の暗闇坂の如き、麻布長伝寺の練垣と赤門見ゆる一本松の坂の如きはその実例である。

私はまた坂の中で神田明神の裏手なる本郷の妻恋坂、湯島天神裏花園町の坂、また少しく辺鄙なるを厭わずば白金清正公のほとりの坂、さては牛込築土明神裏手の坂、赤城明神裏門より小石川改代町へ下りる急な坂の如く神社の裏手にある坂をば何となく特徴あるようと思ひ、通る度ごとに物珍らしくその辺を眺めるのである。

坂になつた土地の傾斜は境内の鳥居や銀杏の大木や拝殿の屋根、玉垣なぞをば、或時は人家の屋根の上、或時は路地の突当りなぞ思いも掛けぬ物の間からいろいろに変化させて見せる。私はまたこういう静な坂の中途に小じんまりした貸家を見付ると用もないのに必ず立止つては仔細らしく貼札を読む。何故といふに神社の境内に近く佗住居して読書に倦み苦作につかれた折窈と着のみ着のまま羽織も引掛けず我が家の庭のように静な裏手から人なき境内に入つて、鳩の飛ぶのを眺めたり額堂の絵馬を見たりしたならば、何思うともなく唯茫然として、容易くこの堪えがたき時間を消費する事が出来はせまいか

と考えるからである。

東京の坂の中にはまた坂と坂とが谷をなす窪地を間にて向合に突立つてゐる処がある。前章市内の閑地を記したる條に述べた鮫ヶ橋の如き、即ちその前後には寺町と須賀町の坂が向合いになつてゐる。また小石川茗荷谷にも両方の高地が坂になつてゐる。小石川柳町には一方に本郷より下る坂あり、一方には小石川より下る坂があつて、互に對峙している。こういう処は地勢が切迫して坂と坂との差向いが急激に接近していれば、景色はいよいよ面白く、市中に偶然温泉場の街が出来たのかと思わせるような処さえある。

市ヶ谷町から仲之町へ上る間道に古びた石段の坂がある。念佛坂という。麻布飯倉のほとりにも同じような石段の坂が立つてゐる。雁木坂と呼ぶ。これらの石級磴道はどうかすると私には長崎の町を想ひ起すよすがともなり得るので、日和下駄の歩みも危くコツコツと角の磨滅した石段を踏むごとに、どうか東京市の土木工事が通行の便利な普通の坂に地ならししてしまわないようにと私は心窓に念じてゐるのである。

第十一 夕陽 附富士眺望

東都の西郊目黒に夕日ヶ岡めぐろ ゆうひおかというがあり、大久保に西向天神おおくぼ にしむきてんじんというがある。俱に夕日の美しきを見るがために人の知る所となつた。これ元より江戸時代の事にして、今日わざわざかかる辺鄙へんびの岡に杖を留めて夕陽ゆうひを見るが如き愚をなすものはあるまい。しかし私は日頃頻しきりに東京の風景をさぐり歩くに当つて、この都会の美観と夕陽せきようとの関係甚だ浅からざる事を知つた。

立派な二重橋の眺望も城壁の上なる松の木立こだちを越えて、西の空一帯に夕日の燃立もえたつ時最も偉大なる壯觀を呈する。暗緑色の松と、晩霞ばんかの濃い紫と、この夕日の空の紅色こうしょくとは独り東京のみならず日本の風土特有の色彩である。

夕焼ゆうやけの空は堀割に臨む白い土蔵の壁に反射し、あるいは夕風を孕んで進む荷船の帆にぶねを染めて、ここにもまた意外なる美觀をつくる。けれども夕日と東京の美的關係を論ぜんには、四谷よつや麹町こうじまち 青山あおやま 白金しろかねの大通おおどおりの如く、西向きになつて一本筋の長い街路すみだがわについて見るのが一番便宜である。神田川かんだがわや八丁堀はっちょうぼりなどいう川筋、また隅田川沿すみだがわ

岸の如きは夕陽の美を俟たざるも、それぞれ他の趣味によつて、それ相応の特徴を附する事が出来る。これに反して麹町から四谷を過ぎて新宿に及ぶ大通、芝白金から目黒行
人坂に至る街路の如きは、以前からいやに駄々広いばかりで、何一つ人の目を惹くに足るべきものもなく全く場末の汚い往来に過ぎない。雪にも月にも何の風情を増しはせぬ。
風が吹けば砂煙に行手は見えず、雨が降れば泥濘人の踵を没せんばかりとなる。かかる無味殺風景の山の手の大通をば幾分たりとも美しいとか何とか思わせるのは、全く夕陽の関係あるがためのみである。

これらの大通は四谷青山白金巣鴨などと処は変れど、街の様子は何となく似通つている。
昔四谷通は新宿より甲州街道また青梅街道となり、青山は大山街道、巣鴨は板橋を
経て中仙道につづく事江戸絵図を見るまでもなく人の知る所である。それがためか、電
車開通して街路の面目一新したにかかわらず、今以て何處となく駅路の臭味が去りやら
ぬような心持がする。殊に広い一本道のはずれに淋しい冬の落日を望み、西北の寒風
に吹付けられながら歩いて行くと、何ともなく遠い行先の急がれるような心持がして、電
車自転車のベルの音をば駅路の鈴に見立てたくなるのも満更無理ではあるまい。

東京における夕陽の美は若葉の五、六月と、晚秋の十月十一月の間を以て第一とする。

山の手は庭に垣根に到る処新樹の緑滴らんとするその木立の間より夕陽の空紅に染出されたる美しさは、下町の河添には見られぬ景色である。山の手のその中でも殊に木立深く鬱蒼とした処といえど、自ら神社仏閣の境内を択ばなければならぬ。雑司ヶ谷の鬼子母神、高田の馬場の雜木林、目黒の不動、角筈の十二社なぞ、かかる処は空を蔽う若葉の間より夕陽を見るよいと同時に、また晚秋の黄葉を賞するに適している。夕陽影裏落葉を踏んで歩めば、江湖淪落の詩人ならざるもまた多少の感慨なきを得まい。

ここに夕陽の美と共に合せて語るべきは、市中より見る富士山の遠景である。夕日に對する西向きの街からは大抵富士山のみならずその麓に連る箱根大山秩父の山脈までを望み得る。青山一帯の街は今なお最もよくこの眺望に適した処で、その他九段坂上の富士見町通、神田駿河台、牛込寺町辺も同様である。

関西の都会からは見たくも富士は見えない。ここにおいて江戸児は水道の水と合せて富士の眺望を東都の誇となした。西に富士ヶ根東に筑波の一語は誠によく武藏野の風景をいい尽したものである。文政年間葛飾北斎『富嶽三十六景』の錦絵を描くや、その中江戸市中より富士を望み得る処の景色、凡そ十数個所を択んだ。曰く佃島、深川万年橋、本所豎川、同じく本所五ツ目羅漢寺、千住、目黒、青山龍巖寺、青

山 稔 田 水 車 、 神 田 駿 河 台 、 日 本 橋 橋 上 、 駿 河 町 越 後 屋 店 頭 、 浅 草 本 願 寺 、 品 川 御 殿 山 、 及 び 小 石 川 の 雪 中 で あ る。 私 は ま だ こ れ ら の 錦 絵 を ば 一 々 実 景 に 照 し 合 し た 事 は な い。 そ れ 故 例 え ば 深 川 万 年 橋 あ る い は 本 所 竪 川 辺 よ り 江 戸 時 代 に お い て も 果 し て 富 士 を 望 み 得 た か 否 か を 知 る 事 が 出 来 な い。 し か し 北 斎 及 び そ の 門 人 升 亭 北 寿 ま た 一 立 斎 広 重 ら の 古 版 画 は 今 日 な お 東 京 と 富 士 山 と の 絵 画 的 関 係 を 尋 ね る も の に 取 つ て は 絶 好 の 案 内 た る や う を 俟 た な い。 北 寿 が 和 蘭 陀 風 の 遠 近 法 を 用 い て 描 い た お 茶 の 水 の 錦 絵 は わ れ ら 今 日 目 の あ たり 見 る 景 色 と 変 り は な い。 神 田 聖 堂 の 門 前 を 過 ぎ て お 茶 の 水 に 臨 む 往 来 の 最 も 高 キ 处 に 倚 ん で 西 の 方 を 望 め ば 、 左 に は 対 岸 の 土 手 を 越 し て 九 段 の 高 台 、 右 に は 造 兵 廠 の 樹 木 と 並 ん で 牛 込 市 ケ 谷 辺 の 木 立 を 見 る。 そ の 間 を 流 れ る 神 田 川 は 水 道 橋 よ り 牛 込 揚 場 辺 の 河 岸 ま で 、 遠 い そ の 眺 望 の は ず れ に 、 わ れ ら は 常 に 富 嵩 と そ の 麓 の 連 山 を 見 る 光 景 、 全 く 名 所 絵 と 異 る 所 が な い。 し か し て 富 嵩 の 眺 望 の 最 も 美 し き は や は り 浮 世 絵 の 色 彩 に 似 て 、 初 夏 晩 秋 の 夕 阳 に 照 さ れ て 雲 と 霞 は 五 色 に 輝 き 山 は 紫 に 空 は 紅 に 染 め 尽 さ れ る 折 で あ る。

当 世 人 の 趣 味 は 大 抵 日 比 谷 公 園 の 老 樹 に 電 気 燈 を 点 じ て 奇 麗 奇 麗 と 叫 ぶ 類 の も の で 、 清 夜 に 月 光 を 賞 し 、 春 風 に 梅 花 を 愛 す る が 如 く 、 風 土 固 有 の 自 然 美 を 敬 愛 す る 風 雅 の

習慣今は全く地を払つてしまつた。されば東京の都市に夕日が射さそうが射すまいが、富士の山が見えようが見えまいがそんな事に頓着するものは一人もない。もしわれらの如き文學者にしてかくの如き事を口にせば文壇は拳こぶつて氣障な宗匠そうしようか何ぞのようて手厳しく擯斥ひんせきするにちがいない。しかしつらつら思えば伊太利亞イタリヤミラノの都はアルプの山影さんえいあつて更に美しく、ナポリの都はヴエズウブ火山の烟けむりあるがために一際ひときわ旅するものの心に記憶されるのではないか。東京の東京らしきは富士を望み得る所にある。われらは徒いたずらに議員選挙に奔走する事を以てのみ国民の義務とは思わない。われらの意味する愛國主義は、郷土の美を永遠に保護し、國語の純化洗練つとに力むる事を以て第一の義務なりと考うるのである。今や東京市の風景全く破壊せられんとしつつあるの時、われらは世人のこの首都と富嶽との関係を軽視せざらん事を希こいねがうて止まない。安永頃の俳書『名所方角集』に富士眺望と題して

名月や富士見ゆるかと駿河町するがちよう

半分は江戸のものなり不尽ふじの雪

素竜りゆう
立志りゆうし

富士を見て忘れんとしたり 大晦日おおみそか

宝馬

十余年ぜんらくてんきょ前 楽天居さざなみさんじん 小波山もと 人の許もとに集まるわれら木曜会の会員に羅臥雲らがうんと呼ぶ眉目秀びもく

麗なる清客があつた。日本語を善くする事邦人に異らず、蘇山人と戯号して俳句を吟じ小説をつづりては常にわれらを後に瞠若たらしめた才人である。故山に還る時一句を残して曰く

行春の富士も拝まんわかれかな

蘇山人湖南の官衙にあること歳余病を得て再び日本に来遊し幾何もなくして赤坂一ツ木の寓居に歿した。わたしは富士の眺望よりしてたまたま蘇山人が留別の一句を想い惆悵としてその人を憶うて止まない。

君は今鶴にや乗らん富士の雪

荷風

大正四年四月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年12月17日第1刷発行

※誤植を疑つた箇所を、底本の親本の表記にやつて、あらためました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくつけています。

※「屋敷」と「屋舎」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「日和下駄《ひよりげた》」一名 東京散策記」となっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2009年12月3日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作りました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆様です。

日和下駄

一名 東京散策記

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 永井荷風

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>